

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」から シェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その三

草 薙 太 郎

1. はじめに

文部科学省科学研究費補助金やドル減らし予算などを使い、富山大学人文学部の研究室に1990年頃から収集し、随時オンラインのデータベース化に取り組んでいる米国シェイクスピア研究学位論文のコレクションから、米国の文化的特徴が読み取れる。それを「『データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文』が表す米国の特徴 その一」¹⁾「その二」²⁾としてまとめた。

その成果をもとに、シェイクスピア=ベーコン説を検証することができるとし、一連の論文発表を計画・実行している。そのことを以下にまとめて提示したい。

データベースの分類項目と対応論文は以下の通りである。(分類項目を列挙し、その後に対応する発表論文名を提示する。)

(1) 移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴

- (a) 心理学、臨床心理学などに関連するもの
- (b) 枠にとらわれない米国流自由研究
- (c) 映画に関連するもの
- (d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの

以上のうち(a)(b)を「『データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア=ベーコン説を検証する その一」³⁾としてまとめ、(c)(d)を「その二」⁴⁾としてまとめる。

(e) 語学的考察に近いもの

1) 富山大学人文学部紀要第40号 (2004).
2) 富山大学人文学部紀要第42号 (2005).
3) 富山大学人文学部紀要第44号 (2006).
4) 富山大学人文学部紀要第45号 (2006).

- (f) 実際に演じることからの論考
- (g) ホモセクシュアルに関わるもの

以上を『『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その一』⁵⁾としてまとめる。今回からシェイクスピア＝ベーコン説を検証することであぶりだされる米国の特徴と、「2001. 9. 11のテロ」以来、世界的な問題となっている「テロ対策」とが、深い関係にあることに重点をおいて論じてゆく。

- (2) そうはいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴
 - (a) 主として英国と関連するもの
 - (b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの
 - (c) 西欧文化全体と関わるもの

以上を『『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その二』⁶⁾としてまとめる。

- (3) 競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする（フェミニズムが典型）圧力のある特徴
 - (a) フェミニズムに関するもの
 - (b) 社会学的な考察をするもの
 - (c) 政治に関わるもの

以上を本稿である『『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その三』⁷⁾としてまとめる。

さらに、「テロ対策」との関連を特に考えなかった(1)(a)(b)を「その四」⁸⁾としてまとめ、(c)(d)を「その五」⁹⁾としてまとめる。

なお、一連の論考は、随時更新されたデータの、発表時での最新データに基いている。

5) 富山大学人文学部紀要第47号 (2007).

6) 富山大学人文学部紀要第48号 (2008).

7) 富山大学人文学部紀要第49号 (2008).

8) 富山大学人文学部紀要第50号 (2009). (予定)

9) 富山大学人文学部紀要第51号 (2009). (予定)

(a) フェミニズムに関するもの

ヴェールを被った女性ということでシェイクスピア作品の登場人物女性の曖昧さを論じる論考¹⁰⁾がある。これだけでマイノリティーがメジャーになろうとするフェミニズムを指摘するのは行き過ぎにもみえる。しかし、特定の女性登場人物を論じるというより「女性」を一括して論じる視点があることは、フェミニズムのヴァリエーションとみてよいと考える。

これだけでも米国の特徴は出ている。シェイクスピア作品の登場人物女性の曖昧さを論じる時、まるでそれが「女性」の選択の問題のように考えることである。

夫を亡くせばどうなるかという視点でシェイクスピアの登場人物の女性を分析するもの¹¹⁾などは、そうしたフェミニズムの視点をとる。女性の男装はフェミニズムか家父長主義への服従かを論じるもの¹²⁾も同様である。

これも夫を亡くした女性にとっての「選択肢」を考え、「男装」という「選択肢」を選ぶ行為について考えるという立場である。民主制か独裁制かという選択肢を考え、日本には戦争を仕掛けて独裁制から民主制へと選択肢を切り替えさせることに成功したのに、イラクではうまくゆかなかったと考え、日本には軍部の独走と平行して、大正デモクラシーを経て、すでに成熟した民主主義が育ちつつあったのに、イラクにはそれがなかったという風には考えないアメリカの精神土壌を思わせる。

ここで、この問題をシェイクスピア研究から推測するばかりでなく、アメリカの社会と政治を直接考える専門家の見方を参考にしてみよう。

それには「アイデンティティ集団」ということばを紹介する必要がある。

これまで米国シェイクスピア研究学位論文をもとに分析してきて、フェミニズムの視点をとる論文には、女性の行動から分析される女性のありかたをすべて「選択の問題」と考える傾向があると指摘したことは、「アイデンティティ集団」という概念を導入せざるを得ないアメリカという国のありかたに関っているのではなからうか。

アメリカはそもそも移民で成り立つ国である。「故郷を捨て、アメリカに渡る」という個人、家族、家系の存続を慮り、その運命を託して、ひとつの決断、ひとつの「選択」に賭けた人々

10) Jones, Kathryn Blair Logwood, *Shakespeare's veiled women: icons for the problem of female ambiguity*, (1990). 930.28||Sh||Jok

11) Oakes, Elizabeth Thompson, *Heiress, Beggar, Saint, or Strumpet: the widow in the society and on the stage in early modern England*, (1990). 930.2||Oa4||He

12) Chang, Hsiao-hung, *Transvestite sub/versions: power, performance, and seduction in Shakespeare's comedies*, (1990). 930.28||Sh||Ch=Um

によって成り立つ国である。とすれば、アメリカは国家そのものが移民という「選択肢」を選んだ人々の集団という意味でのアイデンティティを考えることができる。つまり「アイデンティティ集団」なのだ。これに対し英国や日本は、基本的には「自然な、現実在の、永続的、安定的かつ静態的であるかのように想定する」伝統的な見方でそのエスニシティを規定しうる面が多く、「アイデンティティ集団」的側面の重要性を指摘する必要がときどきあるに過ぎない。

言い換えれば、「天与の国家、民族」で規定される英国、日本などの旧世界に対し、「選択の結果としての国家、民族」で規定されるアメリカという図式が、かなり当てはまることになる。その上で民主化を考えれば、「天与の国家」であれば、民主化には歴史的成熟が必要になる。一方「アイデンティティ集団」であるアメリカからは「天与の国家」という考え方が理解しにくいし、民主化に歴史的成熟が必要ということも理解しにくい。「選択の結果としての国家」であれば、民主主義かファシズムかを「選択する」ことになる。後者を「選択した」とみなした国家は攻撃してでも前者を「選択させよう」ということになる。

この「アイデンティティ集団」という考え方はアメリカの社会と政治を直接考える専門家の意見陳述に登場する。それは「非自発的集団」ということばと関係している。

合衆国憲法の個人主義的な性格を指摘した上で「憲法の個人主義的性格を前提とするとき、実際のアメリカ社会を構成する集団（とりわけ人種やエスニシティにもとづく非自発的集団）の国民社会への統合は、社会経済的メカニズムにゆだねられざるをえない。」¹³⁾とするのは古矢旬である。

その「非自発的集団」とは何かを説明した注の中で、古矢は関連する文献¹⁴⁾も参考にして「自発的集団」「非自発的集団」と並んで「アイデンティティ集団」という概念ももちいるとし、それは、人種、エスニシティだけでなくジェンダーや性選択、宗教などにかんし、個人的アイデンティティを同じくする人々によびかけ、その結集をはかるような集団を意味しているという。「非自発的集団」は、このアイデンティティ集団の一部であるとも考えられるが、集団中のとくに政治的に活性化していない消極的成員もふくむことばとしてもちいるとしている。

またエスニシティを表徴とする集団を、かりに「非自発的集団」とよび、より政治的で、シヴィックな性格をもつ「自発的集団」と区別するものの、エスニック集団を「自然な、現実在の、永続的、安定的かつ静態的であるかのように想定する」伝統的な見方は、歴史的に正確ではないとする。人種、エスニック集団もまた近代ナショナリズムのなかで、みずからを創造し、新しい社会関係のうちで集団的利益追求をはかる過程で変容をよぎなくされる。その意味で、

13) 古矢旬,『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』, (2002), p.165.

14) Sollors, Werner, "Introduction: The Invention of Ethnicity," in Werner Sollors, ed. *The Invention of Ethnicity*(1989), ix-xx.

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

近代社会において純粹の「非自発的集団」などは存在しないという。それなら「天与の国家、民族」という考え方は正確ではないことになる。

以下、この問題を議論するには、古矢旬の論文の内容紹介を多用することになる。これについて、他分野の論文紹介と本稿の関係を予め述べておきたい。

他分野とはいいいながら、極めて広義の英米研究なる分野を想定できないわけではないことから、形式的には文学論の引用と変わらぬ扱いをし、論旨の紹介にあたっては正確を期したい。しかし、アメリカの政治社会史分野における学術的正確さを厳密に期するわけではなく、またその能力が筆者にはない。万が一その点に不備があったとしても、本稿はアメリカの政治社会史分野の論文としての厳密な読みをする読者を想定している訳ではないことを予め断っておきたい。

さて、古矢の記述を参考に考察すれば、一般に「女性であること」は天与のものと考えるところを、アメリカでは性同一性障害者や性転換者でなくとも普通のアメリカ女性が「女性であること」も「選択の結果としての性」と考えているのではないかと思われる面が、少なくともフェミニズムの視点をとる米国シェイクスピア研究学位論文にはあるように思われる。

こうした論文が多く書かれる背景とも解釈できる記述を古矢はしている。

まず古矢は、「非自発的集団」(女性、黒人、ヒスパニック系、アジア系、先住アメリカ人などをさすと思われる。この括弧書きは筆者の推定によるものながら、古矢がここで説明なしにこの言葉を使うことは、近代社会において純粹の「非自発的集団」などは存在しない、という先の記述は極めて厳密な意味解釈をする場合に限定されることを示していると考えられる)の要求に発する歴史と教育の再編は、すでに六十年代後半以降の大学紛争をへて、多くの高等教育機関に少数者集団や女性の歴史的役割を再評価すべく新しい学部やプログラムが設立され、教員、学生編成にアフーマティヴ・アクションによる割り当て制が導入されることによって、緒についたとみられる¹⁵⁾とする。

そして1980年からスタンフォード大学の全新生に必修科目として課されていた「西欧文化」コースが黒人、ヒスパニック、先住アメリカ人、フェミニストの学生による批判を受け、「西欧偏重、白人男性中心主義」だと指摘され、翌年春スタンフォード大学理事会は「西欧文化」コースを改編し、非西欧文化研究と女性、黒人、ヒスパニック系、アジア系、先住アメリカ人の作品をとりいれた「文化、思想、価値」コースの導入を決定した。

古矢によれば、こうした動きは「キャンボン」の見直しであって、激しい批判と擁護の対立が大学の枠をこえ政治問題化してゆく。それはハーヴァード大学をはじめさまざまなエリート大学で教える教員の側の変容も関係していると古矢は指摘する。文学作品には固定した内在的な

15) 古矢旬、『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』,(2002), p.182.

偉大さなどはなく、「価値を創造するのは文脈である」ということになり、結局、問題は「価値を歴史の文脈のなかにおくこと」とされるという。このようないわばポストモダンの立場こそ、少数者集団に属する学生の西欧中心主義攻撃とあいまって、古典的キャンソンの見直しをうながした一大要因であったとみるべきだ¹⁶⁾ という。

ポストモダンの立場は文学作品を歴史的な文脈による相対的評価だという記述を、もし文学研究の論文の中の記述として受け取れば、かなりの物議をかもしことになる。この記述は、本稿ではアメリカの政治社会史の専門家が分析した記述の内容紹介として取り扱うに留めたい。いわば文学の教育研究を実際に行う大学教員の立場からの論述ではなく、カリキュラムを最終的に認定する大学の理事からみた感覚による記述として、単に「紹介」することである。こうした動きに対し、福祉、教育など現在の合衆国が直面している問題を、人種・民族・ジェンダーなどを規準とする「多様性原則」だけによって解決することは不可能とし、原則が一人歩きした場合、すでにみられるようにエスニック集団間、ジェンダー間の対立をひきおこす¹⁷⁾ と古矢は指摘する。

こうした多文化主義の弊害を指摘する記述を念頭におきながら、シェイクスピア研究に的を絞って考察してみよう。

多文化主義の欠陥として、フェミニズムは男女の対立を煽るだけで、実質的な研究成果をあげていないとの指摘は、シェイクスピア研究者にもある。けれど米国学位論文には、ルネサンス女流詩人メアリー・ロスがペトルルカのソネットの伝統である男性の女性への想いの方向を変え、女性側から男性への想いを書いたソネットに注目する論文¹⁸⁾ がある。こうしたペトルルカの流れを汲むソネットのイギリス・ルネサンスにおける変容解析を主軸に、シェイクスピアのソネットの語りを『エドワード三世』『オセロ』と結びつけ、「抒情的戦士」なる概念を導入し、さらにミルトンについても考察する論考である。ソネットを切り口にエドワード三世とオセロを「抒情詩的戦士」としたことは、シェイクスピアのヒーローに「英国紳士」像を見る英国エスタブリッシュメントの見解とは異なり、「アメリカの英雄」的側面があったことを指摘したことになる。シェイクスピアの学んだグラマースクールに後のパブリックスクールに酷似した面があるにせよ、歴史を遡ってエドワード三世に「英国紳士」像を求めるとは無理がある。オセロを「英国紳士」にする解釈にも後世の英国エスタブリッシュメントの思い入れがある。『エドワード三世』にシェイクスピアの筆になる面が確かにあることを指摘したことと同時に、

16) Ibid., p.186.

17) Ibid., p.145.

18) Pitts, Melanie E., *Lyric warriors, lyric women: Gendering Petrarchism in early modern England* (William Shakespeare, Mary, Lady Wroth, Aemilia Lanier, John Milton), (2003). CR||291||1

こうした従来の解釈の欠陥を補う功績はこの論考にある。

つまりシェイクスピア作品は、そのヒーローが「アイデンティティ集団の英雄」であるか「天与の国家、民族の英雄」であるかで揺れていた時代の作品である。英国王政復古期以降、「英国紳士」という形で「天与の国家、民族の英雄」像が固定しはじめた以後の解釈は、どうしても後者の解釈を固定しがちである。その欠落を米国シェイクスピア研究学位論文は、多文化主義に触発されたがゆえの功績として、埋めてくれる面があるのではなかろうか。

家父長支配をめぐるフェミニズムの見地の論文ながら、シェイクスピアは王の政治的肉体、生身の肉体、神秘的肉体を作中の描写で用い、ミルトンは十七世紀ピューリタンの家父長を描き、デフォーは家父長に反抗する家来、ホーソンはピューリタンの家父長を描くといった視点での分析を行うもの¹⁹⁾がある。

国も違い時代も違う作家と作品を並べ、強いていうなら男性作家で「英語」で書いたという共通点（「英語」については時代と地域が全く違う）だけで「家父長の種類」を並べる。これもアメリカ国内で家父長支配をしたがる男性の「選択肢」の分析をして、いわば「敵」の動向分析をしてフェミニズムの戦いをする資料にしようとしているようだ。アメリカの場合、シェイクスピア時代はおろか、ピルグリム・ファーザーズの時代さながらの暮らしを「選択」することも可能なので、それは過去を振り返るというよりリアルタイムの「選択」を考慮する行為になる。これらはすべてシェイクスピア作品の英雄の「アイデンティティ集団の英雄」としての面を分析したことになるのではないか。

フェミニズムの権力関係で、台所の小娘が「かしこまりました旦那様」というだけでも「権力」を持つことがあるとし、プロパガンダではない分析力を強調する論考であって、リア王にとって完全に支配でき、かつ頼り切れる存在としてのコーデリアや、だきしめて殺される快樂を味合うジュリエットなどといった、肉体に注目する視点での考察もするもの²⁰⁾、フェミニズムの論調で明治の女優分析を行なうもの²¹⁾、男性の結婚相手としての存在でしかないシェイクスピアの作中の女性の立場を分析し、オセロに従うべき立場でしかないため、かえってオセロをデズデモーナは守れないし、初めて独立した存在となれる豊かな寡婦も滑稽な喜劇の筋の中心として誰かを不満足にするとし、こうしたゆがんだ女性観は是正すべきだとする論考²²⁾な

19) Porter, Susan Speer, *Domination and Dissent: Gendered Duality and Patriarchal Authority*, (1995). MF||189||17

20) Blaha, Susan Sally, "You should be women": *Constructions of Femalesexuality in Shakespeare's Tragedies*, (1995). MF||189||26

21) Kano, Ayako, *Action Like a Woman in Modern Japan: Gender, Performance, Nation, and the Roles of Kawakami Sadayakko and Matsui Sumako*, (1995). MF||189||27

22) Davies, Lindsay C., *Neither Maid, Widow, nor Wife: Gender, Drama, and Society*, (1995). MF||189||28

どもある。

台所の小娘が「かしこまりました旦那様」というだけでも「権力」を持つことがあるという「権力」を、「旦那様」の「権力取り込み」とみなし、「旦那様」に大英帝国を支える「英国紳士」の映像をダブらせるなら、「天与の国家である英国」の作家としてのシェイクスピア、「国家詩人」としてのシェイクスピアといった考え方になる。

しかし、これらも、いわゆる「アメリカ娘」が論考の対象になる登場人物の女性や演じる女性に自分の身を置き換えて「人生の選択」を考える趣がある。明治の女優分析は著者名から日系か日本人留学生のようだ。しかし常に「選択の主体性」を無条件で認める点が「アメリカ娘」だと思う。つまり以上の論考では「従順」とはあくまで「選択の主体性」を確保した上での作戦のように感じられる。また「だきしめて殺される快楽を味合うジュリエット」とは「アメリカ娘」と「西欧のお嬢様」の隔絶した感覚を改めて感じさせる。「アメリカ娘」が「西欧のお嬢様」の立場になれば、そうなるのかという感慨を催させる。

貴族が特権をふりかざす大陸と違い、イギリスはそれなりに女性が尊重されていた。しかし常に「選択の主体性」を無条件で認められるべきと主張する「アメリカ娘」とは違う。イギリスは「馬の地獄、召使の牢獄、女性の天国」と言われる傭兵の祖国であり、法体系を弄ぶ「貴族・僧侶の天国」ではなかったことは確かだ。ただし、兵の強さを強調する社会では成年男子が尊重され、それが「家父長主義」ということではないか。特権をふりかざす貴族と、その権力闘争によって人形のように扱われてきた女性が抗議の声をあげる（つまりフランスのポーボワールを祖とし「第二の性」であることへの抗議）大陸のフェミニズムとは少し違う。米国は、歴史的にアングロ・サクソン入植の前はルイジアナと呼ばれたフランス系の植民地であった。フランス革命、アメリカの独立戦争を経て、後にフランス型フェミニズムも許容する思想的な裏づけを確保し、西部開拓に力をふるう「肝っ玉母さん」の力もあり、また世界をリードする科学技術革命と都市化の先頭に立つ中で、「選択の主体性」を無条件で認められるべきと主張する「アメリカ娘」が誕生したと考えられる。

もちろんナイチンゲールが「従うことで大英帝国を支配した」とまとめられる論考²³⁾がある。「看護」という従属的立場によって、英国とインドを支配したい欲求を、両国の衛生状態を改善する主張が権威を持つことに変換する。それにより両国を結果として精神的に支配したとする、その「英国のお嬢様」像を描く日本で書かれた論文は、一見「従うことで支配する」アメリカ流フェミニズムと同じ論理で書かれたように見える。しかし、この「英国のお嬢様」像と、「選択の主体性」を無条件で認められるべきと主張する「アメリカ娘」像は微妙に違う。

23) 市川千恵子、帝国を「看護」する—フローレンス・ナイチンゲールのNotes on NursingとLife or Death in India, 英文学研究Vol.LXXXIII, (2006).

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

ナイチンゲールは「看護による支配」を百パーセント「選択」したわけではない。ある程度自分の意思によって「選択」し、ある程度は状況に流されてそうだった。英国である程度女権尊重がなされ、ナイチンゲールの個性、ナイチンゲールを支援する知的な支配階級に属する男性たちの権威があってはじめてなされたことである。ヒラリー・クリントンが大統領選に立候補するように無条件に「選択の主体性」が認められてのことではない。

歴史も国情も無視し、まるですべての人や国家に「選択の自由」が与えられているような乱暴な考察（それがイラク戦争を始める乱暴な思考の背景にあると再三再四指摘している）はアメリカ独自のものである。つまり「天与の国家のヒロイン」に対して「アイデンティティ集団のヒロイン」像をシェイクスピア作品に見て取るということになる。

そこにベーコンはどう位置するかを考えてみよう。

カール・R・ウォレスという人が書いた『人間の性質について語るフランシス・ベーコン—人間の魂の機能』(1967)²⁴⁾によると、ベーコンの心についての考察は「心を含む身体機能心理学」(faculty psychology)の歴史に残るものだという。

ウォレスによれば、十七世紀の始めごろまで、アリストテレスの考え方に従って、人間の感覚器官は、対象物からの信号をキャッチするだけでなく、「イメージ」を組み立てると考えていた。やがてアラビア語からアリストテレスを翻訳する人々は、対象物が直接「イメージ」を発信すると考え、ベーコンもその考えであつたらしいという。

ベーコンはアリストテレスに従って、「心は身体に主人が奴隷に命令するように命令するが、理性はイメージーションに王侯貴族が自由民に命令するように命令し、自由民の方が逆に規制することもある」と言い、多様な経験を理性は秩序だって分割したり構成したりするが、イメージーションは理性を助けることなく、反対に、感覚、知性の材料を、思うがままに結合させるといふ。

この身体感覚を伝達する機能の正確さについて、「主人と奴隷」の比喻と並んで「ハンドメイド」(handmaid) (小間使い) という表現 (分類項目「(g) ホモセクシュアルに関わるもの」) で、ベーコンの自然科学の論文には自然を人格化した上で、その人格へのサディズムがあるとするもの²⁵⁾を敷衍した際に言及)をベーコンが用いている²⁶⁾ことに注目したい。「召使の牢獄」と呼ばれたように、イギリスの小間使いは厳しく訓練されて酷使された。けれど、大陸の人形扱いされた女性たちに比べれば人間としての主体性は確保されていたのではないか。イギリス

24) Wallace, Karl R., *Francis Bacon on the Nature of Man—The Faculties of Man's Soul*, (1967).

25) Patterson, Steven J., *Pleasure's Likeness, The Politics of Homosexual Friendship in Early Modern England*, (1997). MF||198||1

26) *Ibid.*, p.42.

の看護婦はナイチンゲールによって理論化され、世界的名声を獲得する。アングロ・サクソン系のフェミニズムの説得力には、イギリスの看護婦や、訓練された家事のプロとしての存在があって、有名なエリザベス・モンタギューの「青鞥派」の知的活動がある。

ベーコンが「主人と奴隷」の比喩を使うのはアリストテレスを参考にするゆえのことであり、「ハンドメイド」の比喩を使うのはイギリス人としての日常的感覚から来る。「主人と奴隷」では、主人の命令に対する命令された側からのフィードバックがない。「貴族」「自由民」からはフィードバックがある。「主人とハンドメイド」の場合は、一見「主人と奴隷」に似てフィードバックはないように見える。しかし、どんなに酷使され牢獄にいる状態に見えても、実はフィードバックがあるのではないか。ごく緩慢ではあるけれど英国では上の階級の男性との結婚などにより階層を女性は上ることがあって、ナイチンゲールはさらに看護婦というそれまで卑しく見られていた存在を価値あるものにした。そのフィードバックが後に英国のフェミニズムを下支えすることになったのではないか。

この点に関連して十七世紀前後のイギリスの女性の召使に注目し、雇い主の貴族と結婚する可能性を探り、祈りと食事の支度などの家事が直結し、金のためでなく、家系存続に奉仕することを求められていたことを、母親の遺言などで調べた論考²⁷⁾がある。実際の召使の仕事を調べ、ヴァイオラがオーシーノの宮廷で小姓として使え、やがて結婚するフィクションを暴き、祈りと家事に明け暮れ、家系存続への奉仕を強調し、家族愛ではなく金のために働く乳母が嫌われたことを言う。つまり職業選択の自由と正統な報酬要求が前提の社会から、旧世界で当たり前であった、女性の召使や、女性一般の家事労働の曖昧なあり方を告発した形になっている。逆に「お小姓に化けたお姫様、未来の領主夫人」という設定も、曖昧な国家幻想という旧世界特有のヴィジョンなしには成立しないことを気づかせる論考になっている。

ここに「主人の命令に対する命令された側からのフィードバック」という観点を入れると、旧世界の女性が、伝統的で曖昧な社会的要請で働かされることについて、その曖昧さの積極的な意味も感じられる。

さらにいえば、デカルトなど大陸系の自然科学がニュートンの前に敗れたのは、理論への現実の自然からのフィードバックがない精神的土壌のせいだともいえる。

ここに「天与の国家、民族」か「アイデンティティ集団」という議論を重ねると、英国は「天与の国家、民族」という側面が強いにせよ、その中核が議会であり、市民が教会を中心に集うにせよ、その教会が英国教会としてローマ法王から独立するという点が重要ではなかろうか。

科学技術の発達については、常に「中心」と「周縁」が意識される。強国スペインの無敵艦

27) Dowd, Michelle Marie, *Working fictions: Narratives of women and labor in early modern England* (William Shakespeare, *Mary, Lady Wroth*, Thomas Heywood, *Aemilia Lanyer*), (2003). CR||291||1

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

隊を破って英国が勃興したこの時期、「中心」は大陸ヨーロッパであり、「周縁」に近かった英国がベーコン、ニュートン、ファラデーと続く自然科学の巨人たちによって世界に冠たる科学技術大国になってゆく。やがて「中心」になった英国に代わり、「周縁」であったアメリカが台頭することになる。

国家そのものが「アイデンティティ集団」を目指すのはアメリカが最初であって、英国を含めヨーロッパは一応「天与の国家、民族」に分割されていると考えられる。しかし、英国がその無敵艦隊を破ったスペインを例にとっても、レバントの海戦をはじめイスラム教徒との戦いが継続していて、モーロ人といわれるイスラム教徒が国内に生息し、これを追放する政策の影響が語られ、また戦争によってイスラム側の捕虜になるスペイン人もいることになる。その場合スペインという国家への帰属が問題というより、むしろカトリック教徒からイスラム教への改宗をするか、キリスト教徒のままイスラム教徒の捕虜になるかといったことが問題になる。つまり、「天与の国家、民族」というより「宗教的なアイデンティティ集団」の性質が加味される。

ヨーロッパはもともと「ローマ・カトリック支配圏」「ロシア正教支配圏」に分割され、それぞれが各国の王権の支配下にあった。そこに「イスラム教支配圏」に属する国家が侵入してきた。これらをすべて「天与のもの」とすることもできる。「宗教的なアイデンティティ集団」というより「天与の宗教圏帰属集団」という考え方もできるものの、異なる帰属集団に属する者が戦争し、捕虜を抱えるとき、捕虜になるか、戦って戦死者になるかする決断を迫られ、さらに捕虜になれば改宗を迫られる前線では、帰属集団は選択の対象になり、どうしても「天与のもの」ものではなくなる。

結局スペインでは「天与の国家、民族」というより異端審問官を設置して厳しい統制を行う「天与のカトリックの神」が「中心」にあって、そこから王権を発生させた、いささか不安定ながら曲りなりにも「天与の王権」があって、「周縁」はむしろカトリックかイスラム教かを迫られる「アイデンティティ集団化」していたと見てもいいのではないか。

これに対し、英国の場合、ヘンリー八世の再婚問題という人間の都合でこしらえた英国教会の神と、そこから付与された王権を「天与の王権」と見るのは無理ではなからうか。英国の場合ウィリアム一世の征服以来、カトリック教徒の貴族の支配を受けながら、そうした貴族とは別に「天与の国家、民族」が伝統的に存在し、英国教会は英国伝統の「天与の国家、民族」の統合の象徴として英国教会を奉じるアイデンティティ集団を形成したのではなからうか。ただし、現在でも英国教会を奉じる国民の割合は六割程度といわれる。つまり百パーセントではないのだから、英国という国家とイコールではない。英国という国家の「アイデンティティ集団的側面」としかいえない。

英国で支配的な「天与のもの」は、議会、民衆、ウィリアム一世を除いて他国から侵入され征服されたことのない中心部の土地、自然といったものになってしまう。このこととベーコン、

自然科学、科学技術との厳密な関連は、しばらく先で再び論じることとする。一応ここでは、英国伝統の複雑さと、複雑な伝統によって働かされるメイド、複雑な自然を観察する英国独特の自然科学発展の精神的土壌の雰囲気述べるにとどめる。

さて英国のフェミニズムとアメリカのフェミニズムを分けるのは、男性の勲功と不品行、女性の結婚と夫を失うこと及び不品行などによる緩慢な階級移動に着目するかしないのだろうか。言い換えれば「選択の主体性」を無条件で認められる「アメリカ娘」の存在に対する「英国娘」とは何かも考察する必要がある。単に「選択の主体性」がないわけではないものの、極めて不十分な存在というだけではないと思う。

例えばエリザベス女王だけが女性として公的な場で発言できたという認識のもとに、喜劇では男装で行動の自由を得た女性が結婚で終ることが、悲劇では殺人をして処刑されることに対応するとし、言葉ではなく行動でのみ自己表現する女性の姿を、現実と演劇に見る論考²⁸⁾がある。「行動の国アメリカ」からの見方で、明らかに「選択の主体性」を無条件で認められる「アメリカ娘」の存在がある。シェイクスピアやウェブスターの作品から女性が裁判にかけられるシーンを取り上げ、当時、実際に裁判にかけられたアン・ブリンやフランシス・ハワードなどの例とつきあわせ、公平な裁判で罪と罰がどうこうというより女性であることと権威との関係が浮き彫りになることを示した論考²⁹⁾とあわせ、緩慢な階級移動に着目する視点では考えられない論考だと指摘したい。女王や女性貴族を一般化して「女性問題」として扱うことの当否が問われる。それを一般化して論じるのは、女性でも大統領に立候補できる「選択の主体性」を無条件で認められる「アメリカ娘」ならではだと思ふ。

例えばフェミニズムからの家父長論と政治的論考を併せたような魔法論³⁰⁾がある。『夏の夜の夢』で妖精の王に王妃が屈従し、『ヘンリー六世第一部』でジャンヌ・ダルクが否定的扱いを受け、『マクベス』でようやくスチュアート王朝の未来を予見する肯定的役割を与えられるとする。女性が政治的カリスマを獲得できるかを論考したもので女性でも大統領に立候補できる「選択の主体性」がない国では考えられない論考だと思われる。

さて、これを念頭に米国博士論文でフェミニズム関係のものを、さらに見てみよう。

クレシダの物語の系譜を作者不詳の伝承時代から、チョーサー、シェイクスピア、その王政復古期の改作へとたどり、女性の取扱いが曖昧な状態から明らかなアンティフェミニズムへと

28) Perkins, Amy Sue, *The Deed's Creature: Masque, Execution, and the Female Villain on the Renaissance Stage*, (1996). MF||194||25

29) Komara, Kirsten, *Women on Trial in Shakespeare and Webster: Text and Context in Early Modern trial Scenes*, (1996). MF||198||3

30) Cirrone, Steven F., *Shakespeare's Magic: Gender-Based Occult Value in Midsummer Night's Dream, I Henry VI and Macbeth*, (1997?). MF||198||11

変わったとする論考³¹⁾もある。アメリカの独立以降英国が女性への締め付けを強化した面がなくはない。ヴィクトリア朝は女性をモラルで厳しく縛った時代ではあった。しかし、虚構の主人公が王侯貴族から庶民へと中心を変えたという事情もある。むしろ「選択の主体性」を無条件で認められるべきと主張する「アメリカ娘」の存在がある論考ではなかろうか。

フェミニズムの立場が二十世紀の『じゃじゃ馬馴らし』を精妙にしたと指摘する論考がある³²⁾。最後のスピーチに男女の支配関係（家父長的支配からロマンティックな恋愛上の支配までを含む）を見るか、単なるヒエラルキーの表明に過ぎないか、そこにケイトの本音があるか、枠物語の完結がない意味はケイトのスピーチの基盤の脆弱さを露呈させないため、といった指摘もする。

この論考から逆にフェミニズムが前提になったアメリカ社会の一面が垣間見える。伝統的な演出では、ちょっと強引な、いささか人権無視のやり方で口説いても、うまく自分を制御できなくなった女性を育て、愛のパートナーにできるという、テキストにはない「直観」が『じゃじゃ馬馴らし』の前提にある。それはアメリカ流の分析にはかからない。「2001. 9. 11テロ」に対し、アフガニスタン攻撃はよいにしても、イラクを攻撃すれば泥沼化し、アフガニスタン攻撃自体の効果が薄れる「直観」がなぜアメリカに働かなかったのか。自分の国を普遍化し、他国の特殊状況に鈍感な一面がここにもある。

異性装問題を、新歴史主義、フェミニズム、カルチュラルスタディーズなども踏まえ、外形で性を語る限界に迫るとする論考³³⁾がある。これはボーダーレス化する特徴の方に分類すべきともみえる。しかし、この論文のいわんとするところは「外形で性を語るな」というマイノリティーの叫びである。

マイノリティーの叫びといえ、一般の女性をマイノリティーとみなすのではなく、「レイプ被害者の女性」に限定すれば、確かにマイノリティーと認定できる。レイプ体験者が多いクラスでシェイクスピアを教える体験をもとに、女性が男性の所有物であってレイプは所有物毀損とみなされたり、妊娠すれば女性がレイプに喜びを感じたゆえとみなされ断罪されたりするシェイクスピア時代の歴史を踏まえ、ルクリースやラヴィニアというレイプされる登場人物の、とくに沈黙の表現力を分析するもの³⁴⁾がある。

31) Park, Yoon-hee, *Rewriting Woman Evil?: Antifeminism and Its Hermeneutic Problems in Four Criseida Stories*, (1995). MF||189||32

32) Bettendorf, Christie., *The feminist impact on criticism of "The Taming of the Shrew": A case study*, (2003). CR||291||1

33) Sedinger, Tracey, *Epistemology of the Crossdresser: Sexual Policy in Early Modern England*, (1995). MF||189||43

34) Myrick, April Marie, *"Shall I speak for thee?": Lucrece, Lavinia, and the language of rape*, (2003). CR||291||1

この論文で、タイタスがラヴィニアを殺すのを現実には直面したくないからゆえといった、汚れた娘を殺して浄化する前近代的な感覚を理解できない面が示すように、二十世紀以降の現代的な女性感覚を大切にした論考ともいえる。『ヴェロナの二紳士』も援用し、レイプを受容しても決してレイプした男性を許すことがない女性感覚に無理解なシェイクスピアの限界も示す。

今も「レイプ被害者の女性」はイスラム圏では焼却されるという報告があることと、この論文の意識の格差は凄まじい。この意識の格差と、「テロとテロ対策」で動く世界とは、同根かもしれないと思わせる。さらに日本で「女性を焼き殺す」殺人が横行することと無関係ではないのではないか。自分が関係した女性が他の男性と関係すると、それを「汚染した所有物の焼却処分」のように考える強烈な男性の自我意識である。イスラムとは男性中心の社会であって、女性の権力が増すフェミニズムが盛んな西側とは意識の格差が大きい。

王が騎士たちのサービスの見返りに土地を与える封建性は女性に土地所有権を与えない。しかしイギリスでは複雑な形で女性に土地、土地をめぐる遺産など物質的権利が認められてくる。それとシェイクスピアの作品との関連を指摘し、土地所有感覚での支配被支配を女性登場人物で分析する手の込んだフェミニズム論文がある。土地所有権の最たるものとしての父権支配もいう。クレオパトラの「愛はどのくらい」、『じゃじゃ馬馴らし』での結婚の契約性と女性の物質支配などを例に挙げる³⁵⁾ ものである。

土地の所有権は後にジェーン・オースティンの小説の主題になる女性差別の問題でもある。しかし、それは同時に結婚によって地位が流動する英国社会の特性でもある。一方的に女性が支配されることばかりを指摘する場合は「選択の主体性」を無条件で認められるべきと主張する「アメリカ娘」の存在を感じないではいられない。

フェミニズムの立場からのシェイクスピア研究を概観し、男女の性区別の曖昧さ、身体との関係などをシェイクスピアと同時代の喜劇も材料に分析し、良家の子弟が他家へ奉公する慣習などから使用人の立場分析もする。要するに家父長が支配する家族秩序を崩す要素に着目するフェミニズム的論考³⁶⁾ がある。これなどは、ベーコンの「ハンドメイド」を念頭におけば、家父長支配から自然科学が力を持つ時代への移行を暗示して興味深い。

これを英国社会の階級の流動性ととれば英国のフェミニズム、「選択の主体性」を無条件で認められるべきと主張する「アメリカ娘」の存在を感じれば、自国の「家父長制」を棚に上げ、イラク戦争を仕掛けて「家父長支配」をやめさせる荒っぽい論理になる。

35) Conway, K. M., *Material girls: gender and property in Shakespeare*, (1995). MF||189||51

36) Stirm, J.C., *Representing Woman's Relationships: Intersections of Class, Race, and Generation in English Drama, 1580-1642*, (1995). MF||189||54

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

マーストンの作品に出てくる様々な立場の女性たちを取り上げ、その性同一性についてフェミニズム的な考察をする。社会的立場の補強のために女性であることからくる力をどう使うかに着目する論考³⁷⁾もある。

クレシダはコケットではなく戦争に引き裂かれた若い女性であるとする論考³⁸⁾もフェミニズムのヴァリエーションである。

結婚前の欲望と清潔感を軸に女性の性の表現を考察し、ペトルルカの修辞やオーヴィッドとの影響関係にも言及するもの³⁹⁾、姿を消した夫に代わって夫であると主張する男性が現れると、それが嘘とわかっていて受け入れた女性の挿話をもとに、グリーンブラット的新歴史主義的寡婦論を展開するもの⁴⁰⁾は、フェミニズムというより「女性問題」という微妙にフェミニズムに絡む新たなヴァリエーションと思われる。

いずれも一方に「選択の主体性」を無条件で認められるべきと主張する「アメリカ娘」が存在し、それが「不当な取り扱いを受ける場合」を例示して、これからの人生に対処しようといった論調を否定できない。

ここで男女の役割分担の問題が強調されるのではないか。男性が天下国家に関わり女性が家事・育児に関わるという分担は、広く西ヨーロッパ大陸のみならず世界的傾向ではある。しかし庶民レベルに限れば傭兵の供給国イギリスの場合、男性が戦争という天下国家に関わるので、はっきりする。それが家父長(つまり「オトコ」)による「女・子供」支配(フェミニズムでは「オンナ・コドモ」と表記されることも多い)という側面にもなる。しかし育児は「母」という形で天下国家の権力関係とは異次元の支配的権威を持つ。そのことが社会全体の権力関係に微妙な影を宿す。それがイギリスの特徴でもある。

シェイクスピア時代の魔女狩りの状況で、大陸はセックスを強調するが、イングランドがそれ程でなかったとする通説に対し、シェイクスピアでジェンダー問題を論じる論文⁴¹⁾がある。最初の四部作(『ヘンリー六世』三部と『リチャード三世』)家父長が権力を持つ中、女性嫌悪の精神土壌があって、生贖の羊としての魔女が描かれる。同様に『間違いの喜劇』でそっくり

37) Senapati, Sukana Behura, *Wenches, Wives, Widows, Whores, and Witches: Representations of Woman and Discourses of Gender Identity in the Plays of John Marston*, (1995). MF||189||55

38) Zambon-Palmer, Angela, *Character Conceptions of Shakespeare's Cressida in Major Twentieth-Century Productions*, (1995). MF||189||11

39) Bly, M., *The invitation to sensuality : development in the rhetoric of desire from 1590 to 1610 in Shakespeare and other....*, (1995). MF||189||45(930.25||B62||In)

40) Chamberlain, Stephanie Ericson, *"How Came That Widow In": The Dynamics of Social Conformity in Sidney, Marlowe, Shakespeare and Hooker*, (1995). MF||189||47

41) Marks, Elise Anne, *"Excellent Witchcraft": Shakespeare's Witches and the Trial of Gender*, (1996). MF||194||9

な双子がいる情況が、『オセロ』『アントニーとクレオパトラ』『マクベス』で不完全な想像が、『冬物語』で家族の再構成が魔法の力と結びつき、男性の変身、女性の癒し、日常性などが対比される。

女性を本とみなし、そこに書き込む行為を比喩につかうシェイクスピアのテキストを中心に、当時の女性の権利関係も考察し、読み書きの教育における性差別にも言及する論文⁴²⁾がある。

これらは「選択の主体性」を無条件で認められるべきと主張する「アメリカ娘」の存在を考えたいくなるほど乱暴な論考ではない。十分英国の国情を考えた上で、それでも、ある程度「選択の主体性」を認められるべきと主張する「普遍的な女性」の存在を仮定し、その上の論考といえる。

けれど「アメリカ娘」に対する「英国娘」を考えず、いきなり「普遍的な女性」の存在にゆくよりは、「英国娘」とは何かを考えるべきではなかろうか。

シェイクスピアとスペイン黄金期の演劇との比較論⁴³⁾がある。相違点より類似点を強調している。カルデロンの『人生は夢』と、シェイクスピアの『テンペスト』を比較すれば、たしかに「夢と同じ物質で出来ている」人間存在のはかなさ、夢を語る美学で一致する。学識はあるが統治能力に疑問がある存在と、怪物のように欲情を肥大させる存在も登場し、時代を同じくしてイギリス、スペインを問わぬ共通性が認識できる。ただし、相違点がむしろスペイン演劇になじみがない側からは着目させられる論文になっている。

怪物のように欲情を肥大させる存在は、カルデロンの『人生は夢』と、シェイクスピアの『テンペスト』の、それぞれセヒスムンドとキャリバンになる。根本的な相違は、セヒスムンドが王になる設定であるのに対し、キャリバンは王になることなど考えられない設定になっている。カルデロンの『人生は夢』の聖体神秘劇版を見ればセヒスムンドはそもそもルネサンス的人間像そのものだと分る。キャリバンがもしアングロ・サクソン人の蔑視を加味した植民地ネイティブ像だとすれば、植民地人が自治を獲得する困難さをシェイクスピアが認識しているのに対し、カルデロンは認識していないことになる。スペインはカトリック信仰が前提になっているので、統治能力といった政治的配慮は度外視され、信仰を外れたら怪物になる人間存在が、悔い改めれば英明な王になるという荒っぽい人間観になっている。シェイクスピアはすでに無神論を経て真の信仰に至るといった科学者の信仰観の萌芽もあるイギリスで、極めて政治的配慮に長けた作劇になっている。その相違を認識させる。

42) Sanders, Eve Rachele, *Inscribing Selves: Gender and Literacy in the English Public Theater*, (1995). MF||189||62

43) Zaidi, Ali Shehzad, *Studies in Shakespeare and the Spanish Golden Age (William Shakespeare, Pedro Calderon de la Barca, Miguel de Cervantes Saavedra)*, (2003). CR||291||1

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

要するにシェイクスピアは、信仰については狂信を排する近代的合理性を、政治については理念と現実を適当に配合する狡賢さを備えているのに対し、カルデロンは、信仰についてはカトリック的狂信をやや残しつつルネサンスの芸術性を含めたキリスト教に基づく人間観はあっても、近代的合理性には至っていないし、政治的には理念のみを追求して狡賢さはないのではなかろうか。

このことが現実の政治に反映し、英国が大英帝国を築き上げ、ゆっくりと植民地を手放してコモンウェルスを形成したこと、ラテン系諸国とその植民地の、支配者側も被支配者側も理念のみで突っ走る政治的混乱を現しているといつて、そう間違いではないと思われる。

さて「アメリカ娘」「英国娘」の議論に戻れば、狂信を排する近代的合理性が問題ではなかろうか。フランス革命のように合理性を追求して「理性の祭典」を行うこと自体、一種の「狂信」であると考えれば、「狂信を排し過ぎる狂信」を含めた狂信を排する近代的合理性は「英国娘」にはあっても「アメリカ娘」にはないかもしれないと考える。

スペイン黄金期の文学でこのことは明らかではなかろうか。『ドン・キホーテ』は騎士が「思い姫」への情熱的な恋心を抱きながら遍歴の旅をすることがテーマになっている。この「恋愛の情熱」はカトリック的信仰の世俗版とも看做されるのではないか。恋愛の対象になる姫たちも、恋愛については厳しい態度で臨み、まるでカトリックの信仰を守り、異端を排するように、自分の意にそわぬ相手には冷酷ともいえる態度をとり、自分が思う相手には命がけで恋をする。これが大陸ヨーロッパ伝統の「運命の女」「冷酷な美女（ベル・ダム・サン・メルシ）」である。一方、そうした財政的に、あるいは教養の上で貴族とは限らないまでも庶民ではない「姫」たちとは異なり、庶民の娘たちは、お転婆なほど活動的で、ごく普通の人間愛の範囲で恋愛をし、共同体の中で生活する。「姫」たちは、そうした活動的な面はなく、恋愛のために死を厭わない代わり、一般的な生活力はない。

これに対しシェイクスピアが描き出すヒロインのうち、特に初期のコメディに登場する女性たちは、身分としては「姫」であるのに、「お転婆なほど活動的で、ごく普通の人間愛の範囲で恋愛をし、情熱的に恋はしても、恋のために命を絶つことはしそうにない。合理的な解決方法を見出すだけの庶民的な生活力もありそうな「姫」たちである。

これは単にシェイクスピアが紳士階級以上と以下の人々を混同した結果ではないのではないのか。ベーコンがそれまでの聖書やギリシャ・ローマ古典学から発展した自然哲学の「知」と、職人の知恵を合体させる「知」の革命を行ったように、イギリスではローマ・カトリックの影響を排除して、恋愛についても、いわば「恋愛の貴族主義」から「貴族でも庶民でもない近代的理性に目覚めた人間としての恋愛」を実行できる時代に移ったということではなかろうか。それを反映したシェイクスピア作品の方が、熱心なカトリックの信仰が前提になっているカルドロンの作品よりは多くの観客、読者を獲得する「普遍性」を持つことになったのではなかろう

うか。

そうした「普遍的な恋愛」をするヒロインを「英国娘」であると一応規定できる。けれど理論的に「普遍」を言えても、「恋愛の貴族主義」と「恋愛における庶民の生活力」をかねそなえた存在は、少なくとも現実世界における数の面では少なく、その意味では「普遍」に疑問符は付く。この「英国娘」の規定から振り返って「アメリカ娘」を再考してみよう。

オセロに従うべき立場でしかないため、かえってオセロをデズデモーナは守れない。こうしたゆがんだ女性観は是正すべきだとする論考⁴⁴⁾は、まずベーコンのエッセイ等から実際のエリザベス朝宮廷での恋愛事件、恋愛で出世を棒に振る人々と接したベーコンの「恋愛は喜劇の主題」「愛におぼれるのは禁物」といった「座右の銘」を受け、シェイクスピアが「恋愛を主題にした悲劇」を作ってみせ、「愛におぼれる馬鹿な男」を主人公にして、「愚かに愛した」という台詞が観客の涙を誘うようにしたものを、もう一度別の形でベーコン的見解に戻した観がある。

概してフェミニズムの視点をとると、シェイクスピア作品の「ベーコン部分」にばかり注目することになる。

ヒロインに拍手を送るにせよ、演劇に酔うのではなく、批判的に問う態度がどこかになければ、フェミニズムは成立しないのであろう。同時代をすぐれた政治家兼哲学者の目で観察したベーコンのエッセイなしには、そこまで当時の宮廷政治、議会政治、軍隊の派遣状況などに立ち入る立場ではないシェイクスピアが作品を残すのは難しかったであろう。シェイクスピア作品にはそうした「ベーコン部分」とベーコンには書けない、詩人シェイクスピアの面目躍如という「シェイクスピア部分」がある。作品における「理」の部分と「情」の部分とでも言い換えられ、フェミニズムは作品から「シェイクスピア部分」を剥ぎ取り「ベーコン部分」だけを問題にする傾向がある。つまりシェイクスピア＝ベーコン説の一手手前の論考であって、しかも、あらゆる人や国家について「選択の主体性」を無条件で認める危険性をはらんでいる。

ではこの「アメリカ娘」の立場、「選択の主体性」を強調する立場は、果たして「狂信を排した近代的理性」の立場と言えるだろうか。それは『オセロ』と同じく嫉妬にかられ妻を疑って悲劇を生んだセルバンテスの作品と比べれば分かる。セルバンテスには『模範小説集』⁴⁵⁾に「やきもちやきのエストレマドウーラ人」という作品があって『オセロ』と同じく妻を疑って悲劇を生むテーマが展開する。似た挿話は『ドン・キホーテ』にもある。

筋運びの精緻さからいえば、シェイクスピアよりセルバンテスの方が巧みかもしれない。し

44) Davies, Lindsay C., *Neither Maid, Widow, nor Wife: Gender, Drama, and Society*, (1995). MF||189||28

45) *Novelas ejemplares*, (1613).

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

かし、その点がまさに「狂信を排した近代的理性」の立場か否かを分かつのではなからうか。

シェイクスピアの『オセロ』は、筋立てだけからいえば読者、観客を納得させるものではない。イアゴーがそもそもなぜこのようなことを企んだのか、一説には「動機なき悪」と言われ四百年以上も論争が続く。なぜ百戦錬磨のオセロがイアゴーの企みにやすやすと引っかかったのか、父親を裏切って駆け落ちし、戦場に付いてゆく豪胆さを持つデズデモーナが、小娘のように夫になぜ殺されることになったのか、プロット運びの不備は多い。

それにも関わらずこの作品が普遍的とってよいほど多くの国で長年にわたって感動を与えるのは、二人の愛が「狂信を排した近代的理性」の立場によるものだからではなからうか。

特にデズデモーナはベニスの高官の設定ながら、恋愛においては「英国娘」ではないか。自分の夫選びに親の意見はいれず、オセロの人格を愛し、キャシオへの不当な処分には断乎抗議し復職を迫る。ハンカチがどうのこうのを頓着することはない。決して「従うだけ」の女性ではない。

オセロの方は最後に自分のおろかさを悟る「理性」も備えているものの、「殺しておいて愛してやろう」という台詞をはくように、妻への「永遠の愛」を想定する「ときに狂信的にならざるを得ない近代以前の恋愛」の世界を生きている。本来、恋愛に近代以前も以後もない。「永遠の愛」は現代人も希求する面がある。恋愛を含め人間の情念まで理性で規定することはベコンのような政治家、哲学者のすることで、シェイクスピアのような詩人、劇作家がすることではない。けれど、恋愛が展開する世界に「狂信を排した近代的理性」の立場が入り込む余地があるのかないのかでは作品の「普遍性」が違ってくる。

「永遠の愛」と「現実の愛」の突合せは『源氏物語』から『アンナ・カレーニナ』まで、およそ古典といわれる文学に共通のテーマである。そこに、まるで無神論を経て信仰に至るキリスト教圏科学者の多くの信仰のように、「永遠の愛」の否定を経て「現実の愛」に永遠性を見出す恋愛を描いたのがシェイクスピアの特徴ではないか。

これはひとりシェイクスピアの天才がなした業ではなく、「ロンドン市民社会」にそのような恋愛観があったと見るべきではなからうか。

ここで「アメリカ娘」と、「ロンドン市民社会」が育てた「英国娘」の違いを端的に言えば「恋愛・結婚における選択の自由」と「恋愛・結婚における本人の意思の尊重」の違いではないか。同じことのように「選択の自由」という「本人が主張する理念」にするか「本人の意思の尊重」という現実からのフィードバックを絶えず要する「周囲の配慮」に近いことかの違いは大きい。後者が「ロンドン市民社会」の感覚であった。

「アメリカ娘」的な観点から『オセロ』を観劇すれば「デズデモーナの主張が足りない」という不満が残るのかもしれない。けれど「英国娘」的な観点からは「周囲の配慮が足りなかった」という『ロミオとジュリエット』の感想の延長として「配慮できる周囲が不足した環境に

デズデモーナが放り出された悲劇」といった感想も観客が抱けるのではないか。

とはいえ、概ねそうした「ロンドン市民社会」の感覚とはかけはなれているのが米国学位論文である。

結婚を女性の拘束状態ととらえることがルネッサンスのイギリスにあったことを、グリーンブラットのコンテインメント（原住民を脅すような間違ったキリスト教観を与える植民地政策を表現）、「くびき」というシェイクスピアなどの表現、当時のピューリタンなどの文章をもとに解析した論文⁴⁶⁾がある。ジャンヌ・ダルクのドラマのキャラクターとしてのイメージをルネッサンスから列聖時期のアメリカの反応、バーナード・ショーの取り扱い方まで、フェミニズムの観点から論考した論文⁴⁷⁾がある。

これらはアメリカという「アイデンティティ集団」の中の「女性」というマイノリティに属する「アイデンティティ集団」が感じる拘束感が主体の論文で、キリスト教に対する関心が強いものである。

では、こうした論文とは異なる感覚を持つ「ロンドン市民社会」とは、「アイデンティティ集団」か「天与の国家、民族」かという問題が浮上する。シェイクスピア時代の英国は、二つの分岐点にあって、英国本国はやがて大英帝国建設により、国内外にある様々な前者を巧みに束ねて後者の色彩が強い国家を建設した。一方独立したアメリカ合衆国は全体が前者の色彩を強め、国家としての統合を見失いかけるまでに至っている。そこには宗教と科学技術と関連する哲学が絡む。

科学技術は「天与の国家、民族」という考え方が虚像であることを暴き立てる面がある。ニュートンとロックの論争にも見られるように、欧米の科学技術とキリスト教は切り離せない面がある。イスラム教、ユダヤ教と緊張関係にありながら一神教の性格として、科学技術と同じくといってよいのか、科学技術と同根の哲学的問題として「天与の国家、民族」を破壊する面と同時に強固な拘束力を持たせる面があるのではないか。英米と中近東の耐えざる紛争の哲学的原因は、「アイデンティティ集団」を「天与の国家、民族」で縛れない宗教、科学、哲学の問題ともいえる。その一面をシェイクスピア研究が暴き出してくれるのだ。

具体例を挙げよう。シェイクスピアと同時代のスペインは異端審問官を置くほどに強烈なカトリック信奉国家であった。この場合スペインを「天与の国家、民族」とするかカトリックの信仰を共通項とする「アイデンティティ集団」とするかは判断が難しい。古代ローマ帝国で、

46) Ray, Sid, *Holy Estates: Marriage and Containment in Renaissance Drama and Prose*, (1995). MF||189||66

47) Dolgin, Ellen Ecker, *So Well-Suited: The Evolution of Joan of Arc As a Dramatic Image*, (1995). MF||189||64

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

キリスト教がまだ国教でなかったとき、クリスチャンは明らかに「アイデンティティ集団」を形成していた。弾圧が行われたのは、「天与の国家、民族」を破壊する面がキリスト教にあるゆえと考えられる。やがて国教となり、今度はローマ帝国を補強する。ローマが東西に分裂した後、カトリックとロシア正教は、それぞれの地域の「天与の国家、民族」を破壊する面と補強する面を見せている。「国家権力護持」の強力な力を持つからこそ破壊力も持つ。ローマ・カトリックの場合はカノッサの屈辱、バビロン捕囚など、この点に関わる歴史的事件に事欠かない。スペインの場合はイスラム諸国への対抗を迫られる必要もあって、カトリックが国家を補強する面が強いと考えられる。

科学技術はローマ・カトリックの権威が支配する地域では、まさにキリスト教と同じ「天与の国家、民族」を破壊する面から補強する面への転換を見せた。ニュートンの国葬を見て「ポルトガルなら火焙りになった人物を」とヴォルテールが驚いたように、科学技術は「異端」であった時代を経て、やがて英国の成果を見てのことか、国家政策として科学技術振興が大陸ヨーロッパでも行われる。まるでキリスト教が古代ローマ帝国で迫害される対象から国教へと転換したようだ。

問題は英国の科学技術である。

ジェイコブがポイル・レクチャーの重要性をニュートン主義の形成について指摘したようにロンドン市民へのお説教が英国の（そして世界の）近代科学イデオロギーの原点の一つになる。英国教会はローマ・カトリックの迫害を遮断し、ニュートン主義を育てる形で、はじめから宗教と科学技術が一体となっている面がある。問題はそれを享受する「ロンドン市民社会」である。「ロンドン市民社会」とは「天与の国家、民族」になぞらえて「天与の行政区画、その住民」なのか「アイデンティティ集団」なのかが問題になる。

「恋愛・結婚における選択の自由」と「恋愛・結婚における本人の意思の尊重」の違いもここに関係する。「英国娘」の感覚である「恋愛・結婚における本人の意思の尊重」は「天与の行政区画、その住民」としてのロンドン市民の感覚であろう。けれど、その考え方を別天地アメリカに移出しようとするれば、どうしても理念化が必要になり「恋愛・結婚における選択の自由」を唱える必要が出てくる。

結局「ロンドン市民社会」とは近代以後、世界の「アイデンティティ集団」を生み出し続ける、限りなく「アイデンティティ集団」に近い「天与の行政区画、その住民」ではなかろうか。

これを信仰、科学技術、恋愛の観点で歴史的に鳥瞰すれば、まずシェイクスピア時代にはベーコンが「無神論を経て信仰に至るキリスト教圏科学者の多くの信仰」の萌芽になる考え方を「エッセイズ」で示した。この考え方はベーコンに限らず同時代の多くの自然哲学者、科学者に共通したものであったと推定できる。王政復古期以降、ポイル・レクチャーからニュートン主義に至る過程でこの考え方は「ロンドン市民社会」で育てられ、現在では世界の多くの国

家で「アイデンティティ集団」を形成する考え方として、あるいは事実上の「国教」として勢力を拡大している。

これに対応するように「永遠の愛」の否定を経て「現実の愛」に永遠性を見出す恋愛を描いたのがシェイクスピアであったと先述した。こちらの方は王政復古期の改作を経てあまり発展しなかった。理系を重視したドライデンの改作も、実験劇的側面のみ強調して、肝心の恋愛を深く描けず、二十世紀以後、改作よりはシェイクスピアの原作の方がすぐれたものとして評価が定着した。ただし、シェイクスピア時代には大衆を含めて観客の入りが悪いという意味で評価されなかった作品のすぐれた点が評価され、その大衆性を保持したまま「インテリが愛する文学」としてのシェイクスピアの「側面」が確立した。

ひとくちに「永遠の愛」の否定を経て「現実の愛」に永遠性を見出す恋愛を描いたと言い、大衆にもインテリにも愛される文学という。しかし、そのようなことが人類史上いかに稀有な出来事であったかは、例えば我が国の文学になぞらえてみるだけでも実感出来る。紳士階級以上と庶民とが一体になり、インテリが尊重された「ロンドン市民社会」が育んだ文学ということから類推して、例えば「江戸市民社会」が育んだ古典落語を考えてみよう。

男性の登場人物についていえば、熊さん、八つあんの生き生きした庶民が、いつのまにかお奉行様といった支配階級と交わるさまは、シェイクスピアが描き出した職人の世界に近い。けれど、女性はあまり活躍しない。遊女は確かに庶民的な性格と貴族的な性格を併せ持ち、シェイクスピア劇のヒロインに似た性格がある。けれど遊女という特殊性を付与され、熊さん、八つあんの生き生きした庶民の世界とは一線を画している。

熊さん、八つあんの生き生きした庶民の中で同様に生き生きとしたヒロインが活躍し、『源氏物語』さながらのデリケートな恋愛感覚を披露し、恋愛の永遠性を観客に実感させ、そこに本居宣長や新井白石の「知」が垣間見られる「古典落語」があったとすれば、それがシェイクスピアの初期のコメディードということになる。そのようなことは想定することすら難しい。

ただし、一つのジャンルではなく古典落語、歌舞伎、能を総合すれば（歌舞伎、能には『源氏物語』以来の伝統、万葉、古今、新古今の和歌の伝統も織り込まれている）シェイクスピア劇に対応するものはすべてそろっている。この我が国の文学伝統は重要だと思われる。

さて、ここに実際に男根が隠れていただけで生物学的に男性であった者が女性とみなされていた時期から男性に「変身」した例などを解析し、肉体論に向かうフェミニズムの流行によって、シェイクスピア時代を考察した日本女性の論考⁴⁸⁾がある。英語が少し日本人に分かり易いという以外、日本人としてのアイデンティティは感じられない論考である。けれど、その点

48) Nishimura, Kimiko, *Poetry and Poetics of Metamorphosis in Shakespeare's England: A Post-Feminist Perspective*, (1996). MF||194||8

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

こそがまさに日本人のアイデンティティなのかもしれないとも思う。他のアジア各国の女性とは違う、日本女性の「無国籍性」ということである。

「選択の主体性」を無条件で認められるべきと主張する「アメリカ娘」と分析してきた「アメリカ娘」が、国籍を失い、単に「現代女性」といえるほどに世界の無国籍化が進んだことを反映しているのかもしれない。しかしイスラム系の国々やインドや中国からアメリカに留学した女性たちはこのような論文は書かない。それぞれの国籍にふさわしい「アイデンティティ」のある論文を書く。西ヨーロッパ各国に植民地化されたことからのコンプレックスをシェイクスピア作品との関連において分析する。旧共産圏の場合、ツルゲーネフのハムレット=ドン・キホーテ論の影響をひきずりながら、シェイクスピア受容について語る。これらがなくとも、各国のシェイクスピア受容の特色が論文に反映しないことは、まずない。

なぜ、日本だけ「無国籍性」なのだろうか。

この理由を、すぐに日本という文化、文明論に結び付ける前に、シェイクスピア受容を日本のアイデンティティとともに論じようとするれば、まず書かねばならない坪内逍遙について考えれば、そこに、先述の「一つのジャンルではなく古典落語、歌舞伎、能を総合すれば（歌舞伎、能には『源氏物語』以来の伝統、万葉、古今、新古今の和歌の伝統も織り込まれている）シェイクスピア劇に対応するものはすべてそろっている」点を考えるべきではないか。坪内の訳はこれらを動員して訳され、その後の翻訳の基礎になった。しかも、日本は自ら決意して脱亜入欧の政策をとったことはあっても、不本意に西欧に植民地化された屈辱のコンプレックスを、シェイクスピア受容とまで結び付けて語るべきことがある訳ではない。日本人研究者のシェイクスピア論の「無国籍性」はこのことで説明がつくのではなかろうか。

イギリス人でイギリスの大学を卒業し、学位はアメリカでとる場合がある。本人の資質がよりアメリカ的である場合だ。逆にアメリカで学部を終え、大学院をイギリスの大学のものにして、学位をイギリスで取る場合もなくはないであろう。英米のシェイクスピア研究の場合、アメリカとイギリスという二つの研究伝統の違いが大きく、アメリカ人、イギリス人の場合は、学位を取る大学の国籍の方が、本人の国籍より強く論文に反映される。

日本人の場合も、これと同じようにアメリカかイギリスか、学位をとる大学の特質が自分の国籍より強く論文に反映される。それは、むしろ日本文化が坪内逍遙を基点に、完全にシェイクスピアを文化として消化したせいではないか。そこまでシェイクスピアを理解した国は、他に類を見ないともいえる。そのことが米国学位論文をめぐる考察で分かるのだ。

さらに、この項はフェミニズムなので、フェミニズムそのものについて類推が出来る。イギリス系、アメリカ系、フランス系のフェミニズム論が盛んな日本について、日本独自のフェミニズムのなさを指摘する声もある。けれど、日本文化とは、そもそも欧米の文化と対応するような発展を明治以来してきたのであって、実態から浮き上がった論議がこれらだということに

はならないのではないか。それもシェイクスピア研究学位論文から読み取れる。

例えば谷崎潤一郎の作品をセクハラ小説と規定するフェミニズムをアメリカかぶれの浅薄な現象として切り捨てるべきであろうか。

これを考えるには「無神論を経て信仰に至るキリスト教圏科学者の多くの信仰」の考え方は「ロンドン市民社会」で育てられ、現在では世界の多くの国家で「アイデンティティ集団」を形成する考え方として、あるいは事実上の「国教」として勢力を拡大していると先述したことを敷衍する必要がある。

「無神論を経て信仰に至る」のはキリスト教に限らないのではなかろうか。むしろ「インテリの宗教」と呼んだ方が適当だと考えられる。キリスト教圏のインテリも、生い立ちの関係上キリスト教の神を想定しているものの、聖書に述べられたすべてを真実と考えるのではない。カトリックであれば「無原罪のお宿り」をそのまま信じている訳ではない。これらを否定する無神論を経て、しかもなお虚構を信じる信仰の価値を見出すのだ。

むしろ抽象的な神のようなものを信じ、抽象的な天国のようなもの、地獄のようなものを想定するヴィジョンを一方において、実際の世界観は神も悪魔もない物質とエネルギーの世界観である。ただし、それで信仰によって得られる心の安寧も積極的活動の意欲も失わないためには、理系中心の学問的研鑽を必要とする「インテリの宗教」である。

これを「国教」とすれば、それはそのまま「インテリの支配」につながり、「反知性運動」を招くことになる。

まず英国本国では英国教会の僧職資格を得るにはオックスフォードやケンブリッジ大学の大学院を出てなお学問的研鑽が必要なことから、英国教会が「インテリの宗教」であることは確かだ。イギリスでは英国教会という国教によって「インテリの支配」が確立している。そのため「資本主義に反対するデモ」といったデモでさえもが屈折したスローガンを掲げる。

アメリカでは建国と同時にオックスフォードやケンブリッジ大学出の講師を招いてハーバード大学を建設しながら、その後何世紀にもわたる「反知性運動」を繰り返してきた。「反知性運動」の本質は「無神論を経て信仰に至る」ことを逆にすればよい。「無神論を絶対許さず、子供だましだろうと何だろうと宗教ヴィジョンをそのまま信じ、インテリの優柔不断を排する」ということになる。宗教の原理主義とは「反・インテリの宗教」運動と言い換えられる。

理論的に戦争の回避、紛争の調停、合理的な未来への見通しを考えれば「インテリの宗教」がすぐれている。けれど、活力がなくなり「インテリの宗教」を「国教」とする国は衰退傾向を否めない。無神論を経て真の信仰に至るのでは、信仰への情熱が薄れ、学問的な意欲のない大衆を導くスローガンが曖昧なものになって動員力がなくなる傾向がある。

「女性を母として、あるいは未来の母として尊重する」英国流ではなく「マイノリティのアイデンティティ集団の権利」として女性尊重を求める立場からセクハラを規定し、伝統的な

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

文学を攻撃するアメリカ流は、論旨の妥当性はあまりなくとも、活力に満ちている。

米国学位論文のフェミニズムに関わるものは、極端に言えば「シェイクスピア作品はセクハラ文学」と唱えているに等しいものが多い。これと日本の「谷崎潤一郎の作品はセクハラ小説」は、ほとんど同じ文化構造に位置づけられる。

日本を英国と同じ「インテリの宗教」を「国教」とする国といえ、奇矯な意見になるであろうか。日本の多くの皇室関係者がオックスフォード大学に留学し、歴代の皇室関係者は理系中心の学問を修め、国家的に重要な宴席には理系中心の学者が招かれる。もちろん皇室が神道の儀式を行うことを伝統としていることは明らかである。その補強として英国流「インテリの宗教」が影のように寄り添い、実質的に日本を支配しているのではないか。

このことは全く宗教に関心がないように見える女子中学生が友人の死を悼んで述べる弔辞に、たとえ仏式の葬式でも「天国で・・・」が頻出することにも見られる。最近は大人でも「天国で安らかにお眠りください」を仏式の葬式で言う。これは決して日本がキリスト教国になった訳ではなく、実質的に「インテリの宗教」が「国教」だからではないか。抽象的な神のようなものを信じ、抽象的な天国のようなもの、地獄のようなものを想定するヴィジョンが支配的だからではなからうか。

もちろん実際の世界観は神も悪魔もない物質とエネルギーの世界観であって、ただし、それで信仰によって得られる心の安寧も積極的活動の意欲も失わないためには、理系中心の学問的研鑽を必要とする「インテリの宗教」が必要だなどと思う日本国民がそう多くいるとも思えない。

けれど日本が神道の国といわれても天照大神と聖母マリアとどちらの知名度が高いだろうか。キリスト十二弟子と、アメノミナカヌシノカミ、タカミムスビノカミ・・・とどちらの知名度が高いだろうか。仏教の国といわれて釈迦と阿弥陀の区別が付き、如来、菩薩の意味を知る日本国民がどれだけいるだろうかと考えるとき、日本が一見「無宗教の国」でありながら一定のモラルを保つ不思議が言われて久しいことの一つの答えとして、日本「インテリの宗教」国教論も考えうるのではないか。

そう考えれば、「反知性運動」が日本にあってもおかしくはないし、その意味でアメリカかぶれのフェミニズムの論調も、米国学位論文のフェミニズムと同列に論じられる。

(b) 社会学的な考察をするもの

シェイクスピアについての社会学的考察は、世界的な「テロとテロ対策」の状況だけでなく、日本の入国管理の厳しさを含む「テロ対策」についても考える資料を提供してくれる。そして、こうした議論とシェイクスピア論を関連付けるには、次の論考が参考になる。同時にそ

これは前項で論じた「インテリの宗教」国教論を吟味する資料になる。

当時実際にてんかんの発作を起こした事例を軸に、ガレノス（全体として経験主義的でも解剖の実証がなく、加持祈祷的治療も容認）とパルケルス（解剖などの知見を取り入れる。中世的加持祈祷は否定）の医学的見地対立が、非国教徒（ピューリタン、カトリック）と国教会の対立、実証的な新科学導入の機運があるベーコンを中心にした政府と、その支配への反発との対立に反映されたとする。またムーアにはイスラム教の響きがあり、アフリカをそのようにとらえる感覚があったとする。オセロをイスラム教徒、イアゴーをイエズス会士になぞらえることもする。ジェイコブも援用し、新歴史主義的挿話を主体にした科学技術社会論を含む論考⁴⁹⁾がある。

オセロはトルコというイスラム教徒を追い払った將軍である。そのてんかんの発作も、高潔で尊敬される將軍でさえ、嫉妬の感情にとらわれると無様な姿になるという解釈が一般的で、この論考の妥当性は「文学論」としては考えにくい。しかし、科学技術と社会との関係に重要な示唆がある。科学技術、宗教的なイデオロギー、反体制のテロリスト感情の結合である。

体制の中心で権力に近い宗教的イデオロギーに科学技術は結びつく。キリスト教原理主義とイスラム教原理主義の戦いにハイテク兵器、核開発が結びつく。そして我が国のあらゆる建設現場、技術開発現場で、神主を招き起工式を行う風習は、いわゆる右翼的な思想と神道が結びつくより、もっと無意識化されて徹底した宗教的イデオロギーと科学技術の結びつきかもしれない。迷信ではなく、むしろ日本風合理主義の守護神としても神道は働く。

イギリスの場合、キリスト教というよりヘブライ・ヘレニズム文化として宗教イデオロギーと結びつくベーコンの科学は、中流階級以上のものであった。迷信や右翼思想ではなく日本風合理主義の守護神として働く神道は、国民全体に行き渡っている。イギリスのように階級性がある国は最下層に外国人を容れられる。階級性があるわけではなく、ときに一億総中流意識を持つ日本は、日本風合理主義の守護神の信徒でない外国人を容れにくい。

「日本風合理主義の守護神として働く神道」とは何だろうか。儀式ばかりで教義がないことを指摘するのは浅薄な神道論であって、奈良時代以来の文化、国学を中心とした学問のすべてを集大成した「インテリの宗教」が教義としてではなく影のように寄り添うことを指摘したい。日本に明らかな「無神論」がなくとも、学問には実証と合理を求め、何がしか「無神論」的傾向がないとはいえない。その傾向も踏まえ、概ね日本の山河に宿る「神」を抽象的な形で認めるものではないか。そこに明治以来西欧のキリスト教に傾倒したインテリから「キリスト教部分」をろ過し、西欧流「インテリの宗教」部分だけ吸い上げたものも加味される。

ここで英国流「インテリの宗教」と西欧流「インテリの宗教」の違いを考察しよう。大陸ヨー

49) Moss, Stephanie, *Reading Epilepsy in Othello*, (1997). MF||198||2

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

ロッパでは、先述のように、科学技術は「異端」であった時代を経て、やがて英国の成果を見てのことか、国家政策として科学技術振興が大陸ヨーロッパでも行われる。当初カトリックの信仰と相容れなかった科学技術を大陸ヨーロッパが取り入れるには、科学技術を容認し奨励し、ニュートンを国葬にする英国教会に似たものが必要である。それが流血の惨事を生むフランス革命時の「理性の祭典」でもしっくりいかず、カトリック教会そのものではなく、カトリックの信仰を持つインテリたちが、一方でひそかに無神論を経た信仰に近いものを実践して、影のように「インテリの宗教」を寄り添わせることで国家政策としての科学技術を容認したのではなかろうか。

我が国でも似た現象が起こっている。キリスト教系「インテリの宗教」といえば内村鑑三と無教会派クリスチャンが思い浮かぶ。けれどカトリック教徒も我が国の中枢に多く存在する。大陸ヨーロッパが国策として科学技術を取り入れたように、我が国も西欧科学技術を取り入れ、国学の伝統に西欧流「インテリの宗教」を寄り添わせた。国学の伝統それ自体にカトリックほどにも科学技術と相容れない要素がなく、それ自体「インテリの宗教」であったことから、これはスムーズに事が運んで今日に至っているのではなかろうか。

美智子妃の実家がカトリックで、宮中でキリスト教の話をするのを昭和天皇が厳しく禁じたことは有名である。しかし、カトリックの信仰を持つ家庭から皇后になることが許されること自体が、カトリックと日本の体制との間にさして軋轢がないことを物語る。現在の皇室はフランス料理を公式料理とする宴席に理系中心の学者を招き、その意味で西欧流「インテリの宗教」を「国教」として遇し、多くの皇室関係者がオックスフォード大学に留学することで英国流「インテリの宗教」も取り込んでいる。

それは明治の脱亜入欧政策で坪内逍遙がシェイクスピアを消化し、後の翻訳者を含め、日本人のシェイクスピア論が英国流とアメリカ流の二流派に分かれるにせよ、生な日本のアイデンティティを言い立てる必要がないほどに至ったことと同じことを「国教」について行った結果ではないか。つまり前項で指摘した「無神論を経て信仰に至るキリスト教圏科学者の多くの信仰」の考え方とその「反対勢力」が「ロンドン市民社会」で育てられ、現在では世界の多くの国家で「アイデンティティ集団」を形成する考え方として、あるいは事実上の「国教」として勢力を拡大していると先述したことである。英国と同じく西欧流「インテリの宗教」が日本国家に影のように寄り添い、実質的に日本を支配している（必然的にその支配への反対勢力を生むことになる）と思われるその「インテリの宗教」である。

上記のてんかんの発作から説き起こす『オセロ』の科学技術社会論的論考を、「文学論的不適切さ」を捨象すべく再考するとすれば、まず大陸ヨーロッパの文学（『オセロ』のソースにイタリア文学Cinthioの小説があり、ほとんどプロットが同じ）をシェイクスピアがイギリスの舞台にのせようとしたことの意味を考える必要がある。

ローマ・カトリックの信仰が体制の中心を占め、その体制を揺るがす勢力との戦いがあるという点に着目すれば、『ドン・キホーテ』を生んだ黄金期のスペイン文学を考えるとはっきりする。アフリカ、ムーアがイスラム教を連想させるのであれば、オセロはイスラム教からカトリックに改宗した將軍で、イアゴーは逆にカトリックからイスラム教に改宗し、それを隠してカトリック側の体制転覆を狙っている人物ということになる。デズデモーナをカトリックの体制側の由緒ある家庭に育った女性とする。そうすれば『オセロ』は主人公二人の駆け落ちにつけこんだイスラム教徒側の陰謀とすることで、普通の当時のスペイン文学になる。セルバンテスが作者であれば、もっと信憑性のある複雑なプロットにすることも可能であろう。

これをそのままイギリスの体制対反体制に置き換えて考えれば、当時イギリスの体制を脅かすものはイスラム教徒とイエズス会士であった。オセロをそのままイスラム教徒に、イアゴーをイエズス会士にすれば『オセロ』は英国に対して反体制の主義主張を持つもの同士の争いになる。ではデズデモーナはイギリスの体制側に属しながら知らずに反体制派の將軍に恋をしてしまった悲劇のヒロインになるのだろうか。この解釈で妥当な面もあれば、そうでない面もあると考える。

妥当でない面を先に述べれば、シェイクスピアの『オセロ』が文学としてすぐれているのは敵対する勢力の中で陰謀がうずまき精緻で信憑性のあるプロット運びがあるからではない。敵対する勢力の中の陰謀、プロット運びという点なら隙だらけである。また、オセロの、体制への忠誠心に疑問符を付けると、オセロの人格の高潔さがなくなってしまう。高潔な人格と自らの恋心に忠実なカップルの恋愛でなくなる。

妥当な面は、前項で述べたように、デズデモーナはベニスの高官の設定ながら、恋愛においては「英国娘」で先の科学技術社会論的論考でいう合理的、実証的医学を支持するペーコン中心の政府の側に立つものということである。非国教徒と加持祈祷を容認する医学がこれの反対勢力とすると、本稿で提案している「インテリの宗教」対その反対勢力の対立の図式に入れることが出来る。

この対立はアメリカに引き継がれ、概ね「東部インテリ」（後には「東部」に限らないインテリと看做された人々）対「反知性運動」でその歴史が築かれていったとしてもいいのではなからうか。

こうした社会学的な手法によるシェイクスピア論から「インテリの宗教」といった宗教について語ることの妥当性について、「子不語怪力乱神」（論語第四卷第七述而篇）の伝統によって、超越的な宗教ヴィジョンとは関わらなかつた中国について考察することで検討してみたい。

デカー、ポーモント、シェイクスピアのヘンリー・シリーズを対象に労働者階級について考

察した論考⁵⁰⁾がある。『ヘンリー五世』の中で、プリンセス・キャサリンにメイドが英語を教えようとし、身体の部分を現す語が卑猥な発音なのでキャサリンが発音を拒否することを論評した部分⁵¹⁾に少し奇異な注⁵²⁾が付されている。maids of honourが生まれは良くとも仕事は労働者階級と同じだとある。その政治的影響力はあなどれないと但し書きがあっても奇妙な注である。男性が主導権を握るイギリスの宮廷に事実上レイプされてキャサリンが嫁ぎ、レヴィ・ストロースのいう文化人類学的な「贈り物」としてヘンリー五世が獲得する「もの」となるという趣旨である。共産中国がブルジョア批判をした感覚をひきずっている。あらゆる精神的な国家幻想を取り払って生産関係に還元する。

「maids of honourが生まれは良くとも仕事は労働者階級と同じだ」という注に奇異の感を抱くのは、まず当たり前のことをわざわざ注をつける奇異の感である。マーク・トウェインの『王子と乞食』で、王子としての食事をするとき、ナプキンを取ることから始まり、あまりに日常的なことを、傍にはべる廷臣が先祖代々の職務として行うので、鼻がむずがゆくなったとき、誰かに搔いてもらおうとし、王子の鼻を搔いてさしあげる先祖代々の職務を持つ貴族がないので周囲が当惑したという話がある。これはアメリカからイギリスの貴族制への批判になっている。けれど、これは制度を理解した上での批判である。

上記の論考の場合、maids of honourの給料まで調べて生産関係に還元する論考になる。あらゆる精神的な国家幻想を取り払っての論考とはいえ、マーク・トウェインと違って、精神的な国家幻想を、批判するというより、そもそも理解していないのではないかという疑いを抱かせる。

古代ローマ帝国がキリスト教を国教として以来、キリスト教は国家幻想の一翼を担ってきた。ローマ・カトリックの権威は、その後西ヨーロッパで勃興した国々の国家幻想と持ちつ持たれつの関係にあって、国家の権威付けにローマ・カトリックが利用されたことが、逆にローマ・カトリックの権威を今日まで維持した理由にもなっている。

西欧と日本、アメリカについて、国家から完全に宗教色を払拭することは出来ないのではなからうか。ロシア正教の権威の下にあったソ連の場合、ソ連崩壊がそのままロシアの復活、ロシア正教の復活につながることは、逆に宗教をアヘンとして厳しく規制した共産党自体が一種の宗教性を有していたとも解釈出来る。神の国の実現を願うキリスト教のヴィジョンに似た共産革命の希望を持ち、マルクス・レーニン主義の教義を持つ「宗教」でもあった。

50) Cheng, Yueh-Ting. *Voices from the margins: Working-class mobility in early modern England* (William Shakespeare, Thomas Dekker, Francis Beaumont), (2003). CR||291||1

51) Ibid., p.71.

52) Ibid., p.80.

中国については、そもそも中国共産党に宗教色が微塵でもあるのかどうか、大変難しい問題ではなからうか。そのことを考えるヒントとして、上記の中国人の手になるとされるシェイクスピア論が参考になる。

上記の論考を批判するには、なぜ共産圏が引きずるツルゲーネフのドン・キホーテ＝ハムレット論が間違っているかを確認すればよいのではなからうか。それはハムレットをドン・キホーテにってしまったら、ハムレットを有名にしている「近代人としての苦悩」が読み込めないからである。ハムレットの「生か死か・・・」の独白はモンテーニュの懐疑主義に類似するといわれ、「無神論を経て信仰に至る」近代自然科学の「インテリの宗教」へゆく寸前の境地で、宗教的ヴィジョンを一方で手放さざるを得ないのに、同時にある程度それに頼らざるを得ない近代人の苦悩の表現のはずだ。

共産圏が引きずるツルゲーネフのドン・キホーテ＝ハムレット論は、この苦悩を、強大な権力機構にたちむかう革命の闘士の、ドン・キホーテ的向こう見ずにすりかえてしまう。

では、ドン・キホーテはなぜ「近代人の悩み」を持たないのかを考えよう。それは、そもそもスペインがイスラム教と敵対して強固に守ろうとしたカトリックの信仰は、当時「懐疑主義」や「宗教ヴィジョンを疑う考え」の入りこむ余地がなく、セルバンテスがこれらを表現したとしたら、カトリックの信仰を騎士道にすりかえてしたとしか考えられない。

またカトリックの信仰そのものに「懐疑主義」や「宗教ヴィジョンの否定」を入りこませにくい性質がある。今なお法王が他国を訪問すると大地に接吻することで象徴されるように、いわば「大地の宗教」であって、ハムレットのように天を仰いでそこに神がいるかいないかを問うようなものではないことにある。

ロシア正教もまたカトリック以上に「大地の宗教」である。ロシア正教関係を論評した文章には「大地」という言葉が頻出する。

カトリック、ロシア正教に共通するのは聖母マリアの存在であって、この女神は大地の豊穡を一方で象徴し、麦の穂とともに描かれる。

ここから中国との関連を考えるにはラピスラズリがシルクロードを経て正倉院にまで伝わり、仏教と関わりが深いとともに、その青は聖母マリアの衣の色とも言われている点が有用である。つまりヨーロッパからアジアにかけてユーラシア大陸は「大地の宗教」でくれ、それがローマ・カトリック、ロシア正教、仏教の共通項として、少なくとも宗教の文化史的側面として認識されるということである。

こうした「壮大なくくり」は必ずしもこじつけではなく百瀬泉の「能とシェイクスピア」に関する論考は、シルクロードの両端に位置する、我が国真言密教の仏教と、カトリックの信仰の中に根付いた新プラトン主義の関係を論じ、シルクロードの東の端と西の端の関連を論じる。これに能勢朝次の「能楽源流考」を加え、その女形論を援用すれば、ヤン・コットが感動した

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

玉三郎のマクベス夫人の演技を「ユーラシア大陸のモラルティ」で説明することも、そう荒唐無稽ではない。玉三郎がロシア映画に出演してすぐれた演技ができる理由にもなる。「大地の宗教」を中核に、言語を超えた、踊り、演技といった芸能文化史的考察でよければ、それだけの大風呂敷を広げることが出来る。

ただしそれは芸能文化史に限られる。中国歴代の王朝で「国教」として採用された儒教が「大地の宗教」だといいたてることは出来ない。宗教であるかどうかとも疑わしい。

ましてや、ドーバー海峡を渡って、シェイクスピア時代のベーコンを中心にした近代哲学まで大風呂敷の中に包み込み、ハムレット的近代人の悩みを論じるのは、無理ではなからうか。庶民に根付く「大地の宗教」からは、叙事詩に関わる芸能文化史的考察なら広範囲に類似のものを求められ、『ドン・キホーテ』と関連付けられる。しかし、高度な哲学と抒情詩が結合したシェイクスピアの詩句と、近代人の悩みを抱えるハムレット像は関連付けにくい。

この叙事詩と抒情詩の違いは有用ではなからうか。「大地の宗教」という大陸文化に対して「インテリの宗教」という英国文化を対置させただけでは、そもそも「宗教」の存在が疑われる中国をカバーできない。ここに叙事詩と抒情詩の対立を加えれば、問題がはっきりするように思われる。

『ドン・キホーテ』の作者セルバンテスはレバントの海戦に参加し捕虜となり、身請けされて帰国し作品を残した。戦争体験が文学の底にある場合、どうしても叙事詩的感性を指摘せざるを得ない。この感性があるがゆえに、ハムレットの「生か死か・・・」の独白に「戦い」を読まないではいられないことになる。「戦い」と切り離して考えうる、宗教ヴィジョンを手放そうとして手放せない近代抒情詩の感覚が登場しない。

カトリックのスペイン、ロシア正教のロシアと並んで中国に「大地の宗教」を指摘できるかどうかは疑問な点があるにせよ叙事詩の伝統は指摘できる。文字通りの叙事詩というより叙事詩的感性である。「国敗れて山河あり・・・」は戦争を下敷きにした叙事詩的感性と見る。文学分類では抒情詩である芭蕉の「夏草や兵どもが夢のあと」も同じ感性を読み取れる。

これに対してここでいう近代抒情詩的感性とは近代的な哲学認識や世界観を重要として、戦争など出来事に立脚しないものをいう。ハムレットの「生か死か・・・」の詩句を支える哲学を、ベーコンとシェイクスピアとの関連でいえば「無神論を経て信仰に至る」「宗教ヴィジョンを手放そうとして手放せない」「神も悪魔もない物質とエネルギーの世界観に改めて宗教ヴィジョンを導入する」といったベーコンを中心とした当時の自然哲学者の感性を、シェイクスピアの詩人としての感性、つまり抒情詩的感性で表現したものである。こうした自然哲学による宗教感覚が英国教会に影のように寄り添って「インテリの宗教」として国家の支配力を補強した。シェイクスピアが後に国家詩人に祭り上げられる要因にもなったと考えられる。

そのことを考え、改めて我が国の以下の「抒情詩」を見てみよう。

うすき濃き野辺の緑の若草の跡まで見ゆる雪のむら消え
かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

宗教的感性なしに、冬から春に移る時期の植物や、夜が更けるときの星といった自然観察の記録とも読める。ここにハムレットのように自然の中の人間の孤独を見つめている存在を読み込むことは、ただちには無理がある。けれど、明治以降、このような「抒情詩」を多く生み出した民族であれば、自然哲学から自然科学を生み、科学技術的世界観を重要視する英国流「インテリの宗教」ヴィジョンを国家の中枢に採用することなど、雑作もないことではなかろうか。

かつて勅撰集編纂を重要な国家事業とし、歌会始で毎年「抒情詩」を宮中で読み上げることに、「インテリの宗教」と「抒情詩的感性」の結合を見て、英国シェイクスピア時代に始まる科学技術立国を我が国も継承していることの証とする見方は間違っているだろうか。

英国ではハムレットの近代抒情詩的感性は、そのままパブリックスクールからオックスフォード、ケンブリッジ両大学に進学するものの必須科目になって、科学技術立国の大帝国の支配原理になった。これには当然「反知性運動」的な反発がある。英国でベーコン説を唱えるのは、アメリカの「反知性運動」に近いものがあるのではないか。

「反知性運動」は「インテリの宗教」と「抒情詩的感性」の結合を嫌う。「抒情詩的感性」を否定すれば、シェイクスピア作品が参考にしたベーコン哲学と、天才的な詩作の腕があって初めて世に登場できるシェイクスピアの詩句との区別がつかない。

『平家物語』など本物の叙事詩が出現する前に『万葉集』という抒情詩を生み出した我が国の支配階級の感性に対し、柿本人麻呂の「抒情詩」にさえ「刑死説」を唱える「叙事詩的感性」の持ち主である梅原猛が、「ベーコン説」信奉者の猿之助と手を結ぶのも、一種の「反知性運動」好みのなせるものではなかろうか。

アメリカの「反知性運動」が聖書学、ギリシャ・ローマ古典学に職人の知恵を合体させたベーコンの革命の延長として、アメリカにビジネスと工業製品の科学という「知」の発展をもたらしたように、猿之助の歌舞伎門閥制度批判と梅原猛の日本抒情詩の伝統に叙事詩を読み込む感性は「スーパー歌舞伎」という歌舞伎再生の糸口かもしれないものを生み出した。

ここで「叙事詩的感性」「抒情詩的感性」を、社会学を念頭においた定義付けを行っておきたい。前者をコーホート（同じ年代に生まれた集団）別の意識調査に関わる感性、後者をコーホートとは無関係な意識調査に関わる感性と定義づけ出来る。社会学の意識調査でコーホートを使うのは戦争体験など同じ世代が経験してその意識に大きな影響を与えることを問題にすることが多いからである。

死を眠りのようなものと考える一方で死後の世界が分からぬ不安、この世を渡る庶民感覚の

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

苦勞を述べる一方で、あの世に救いを求めようにも、あの世を規定する宗教ヴィジョンへの信頼感がもうひとつである心情を述べたハムレットの「生か死か・・・」の独白は、そのままではコーホートとは無関係な意識調査に出来る。「あなたは死についてどう思いますか?」「死を極力避けたい恐怖として捉えますか、安樂をもたらす救いと考えますか?」「死後の世界を信じますか?信じるとすればそれはどのようなものですか?それを描く宗教を信じますか?」といったアンケート調査になる。自殺をしたい人や死刑囚の意識調査になりうる。そんな意識調査がもし可能なら、自殺者対策や死刑廃止論の是非に応用出来る。

こうした感覚がシェイクスピア解釈で少なくとも英国と日本の学会の主流から見た感覚だと考えられる。特に「死を極力避けたい恐怖として捉えますか、安樂をもたらす救いと考えますか?」というアンケート調査に呼応する言説がハムレットの独白だという解釈は日英の観客には普通の解釈として受け入れられると考える。これがハムレットの近代的苦惱を表現する「抒情詩感性」と考える。

一方、この調査を、戦争体験を主体にしたコーホート、それも従軍経験者に実施すれば、前半の問いに対する答えは「死は極力避けたい恐怖に決まっているが、安樂をもたらす救いだとすれば、死を極力避けたい努力に疲れたとき、もはやそうした努力をしなくてすむからだ」という答えになり、「宗教を信じるか?」という問いに対しては、戦争指導者が推奨した宗教ヴィジョンを信じるか信じないかに意識が集中し、信じれば敵が地獄に墮ち味方が救われるヴィジョンになり、信じなければ戦争指導者が地獄に墮ちるヴィジョンになる。それとは別に、それが戦後帰還した兵士への調査であれば、戦友との連帯感からくる、ときに「生き残った罪悪感」も発生させる「宗教ヴィジョン」の考察が付け加わる。こうした意識調査は第二次世界大戦やベトナム戦争からイラク戦争までの関係者の意識調査に応用できて、テロ対策にも関わる。これが戦争体験を踏まえれば誰もが叙事詩的になることを考えた「叙事詩的感性」である。

この後者の感覚はハムレット=ドン・キホーテ論につながる。つまり「戦場では与えられた宗教ヴィジョンを疑っているひまがない」という事実があって、カトリックの信仰を疑うひまなどなくイスラム教徒と戦い、身命を賭した体験を、半ば戯画化して表現したのが『ドン・キホーテ』ではないか。セルバンテスが「騎士物語のヴィジョンを現実のもの信じ込んだ人物」を設定した小説に書きあげたのは、戦場では騎士であることを、好むと好まざるとに関わらず、選択の余地なく迫られる悲喜劇ともいうべき状況ではなかろうか。これは戦争に駆り出された従軍者の感覚であって、戦争指導者の感覚ではない。戦場が鍛えた古参軍人の人格と、自己客観化、自己戯画化の意識がドン・キホーテに結実している。

「戦場では与えられた宗教ヴィジョンを疑っているひまがない」と並んで「戦場では死を恐れているひまがない」という事実がある。シェイクスピア作のハムレットの「生か死か・・・」の独白とベーコンのエッセイを比べてみよう。「データベース: 米国シェイクスピア研究学

位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る。その一」⁵³⁾の繰り返しになることながら、ベーコンにも「死について」と題するエッセイがある。その書き出しを少し引用してみよう。

人は死を恐れる、子供が暗がりを恐れるように。子供のそうした自然な恐れが物語を聞かされることで助長されるように、人々の死への恐れも助長される。確かに死を罪の報いとし、あの世へ行く過程とし、死について黙考することは尊く宗教的である。しかし自然への貢ぎ物としての死への恐れは人を弱くさせる。さらに宗教的な黙考では、しばしば虚栄と迷信の入り混じりがある。(ESP版からの拙訳)

死への恐れに関する「文学」も、事実上「宗教」も否定し、死への恐れを克服し、「知」を武器に戦う政治家、自然哲学者の面目躍如といった論考である。ベーコンは大法官であったものの戦争指導者の立場より従軍者の立場からのエッセイが多い。自身自己の哲学を主張する「闘士」であった面がある。

そう考えるとシェイクスピア＝ベーコン説もハムレット＝ドン・キホーテ説と同じく「与えられた宗教ヴィジョンを疑うひまがない」競争社会、戦争遂行社会、イデオロギーを絶対視する社会で信じられる説といえる。

このことから「アングロ・サクソン民族の、マイノリティーをメジャー化する圧力」について語れる。つまりカトリックの宗教ヴィジョンの懐疑を許せる英国教会の成立の背景に、アングロ・サクソン民族特有の資本主義志向、競争の是認志向を見るからである。

シェイクスピアがヘンリー・シリーズで描いた薔薇戦争は、王位継承の争いながら、背景にパーシー族とネヴィル一族の争いがあり、ロンドンの商人と手を結ぶ駆け引きがある。大陸ヨーロッパの王権と違って、英国王室は必ずしもローマ・カトリックと権威付けのための持ちつ持たれつの関係があったわけではない。カトリックの宗教ヴィジョンに懐疑を投げかけて破門されても、それが王権の致命傷にはならなかった。むしろ、資本主義的な競争原理に近い争いのメカニズムが働いていた。その中で多くの貴族が首をはねられて殺されるのである。

マクベスがダンカン王殺害の罪を、血を塗りつけて他人に押し付けた虚偽がばれるのではなく、自らも手が血に染まるという幻影が実現してゆくのが作品の展開だとする論文⁵⁴⁾がある。血塗られること(外面性)が一人歩きする環境に、当時の大衆、商品流通、文学の関係があっ

53) 富山大学人文学部紀要第47号(2007)。

54) Anderson, Susan Cambell, "Steeped in the Colors of Their Trade": *Commodity, Authority, and Self-Articulation in Jacobean Popular Literature*, (1995). MF||189||78

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

たとする。ヘンリー四世、五世をめぐるシェイクスピアのシリーズなどを、こうした考え方で解析する。

「暗殺」が市場を闊歩するのは暗殺を含む連続殺人事件をプロファイリング技法で解決したFBI捜査官レスラーの著書とその映画化（分類項目「(c) 映画に関連するもの」で言及）を思わせる。こうした現象と現象の社会学的考察がイスラム原理主義者によるテロに対する「テロ対策」と深く関連することを、さらに説明したい。

まずレスラーに関する点を簡潔に記せば、レスラーの記述に出てくる、ロバート・ケネディ暗殺犯が持つ、鏡に映した自分の顔が粉々に壊れる妄想は、エセックス一味が反乱の景気付けにした『リチャード二世』の有名な退位シーンで、退位を迫られた王が鏡を持ってこさせ「これが臣下をはじめ皆が太陽のようにあがめた顔か」と自分の顔を見て、鏡を床に叩き付け粉々に割るシーンに酷似するということである。

この「退位の儀式」に関連して『ヘンリー四世第一部』では寝ている父親であるヘンリー四世の王冠をハル王子（後のヘンリー五世）が自ら被ってみて、それを、目をさましたヘンリー四世に見咎められる「退位・即位」の模擬儀式シーンがある。

これに関連して社会学的歴史的コンテキストとテキストの関係を考察し、そこに上演問題を絡めるといった手法で、ヘンリー・シリーズは、結局国家や政治から家族と個人に焦点が移っていることを指摘する論考⁵⁵⁾がある。これも、国家や政治から家族と個人に焦点を移しながら世界を席卷してゆくアングロ・サクソン民族の、マイノリティーをメジャー化する圧力を内部にも外部にも持つ特徴を表しているのではなからうか。カトリックの信仰が絶対であって、王権争いはローマ法王を味方に付けるか否かが勝負の分かれ目であった大陸ヨーロッパと違い、確かにヘンリー六世を捕まえるために法王の使者の権威を借りるエピソードはあったにせよ、薔薇戦争は、全体としてカトリックの信仰とは独立した戦いである。いままで勢力が弱く権力に遠かったものが、勢力拡大をしようとする努力が、その戦いの活力を引き出す。

つまり多少なりとも王家の血筋があれば、誰もが王になれる（ということは、王候補を押し立てて権力を誰もが握れる）「選択の自由」を確保し、堂々と敵の首を切り落とす殺人を行い、また親戚に首を切り落とされた者が多いことでその貴族性を誇ったのが薔薇戦争であった。

アメリカ社会とは、あらゆる人や国家について「選択の主体性」を無条件で認める上で、市場経済によって巨富を得る英雄になることを人々に期待する。その成功を目指すには「犯罪に手を染めるに似た」決意と自己誘導が必要なことを、例えばナポレオン・ヒルなどは説く。

55) Martin, Richard Alexander, *Textual theatricality: the figure of the stage in Shakespeare's second Henriad*, (1990). 930.28|Sh|Mart

「くり返し嘘をついていると、いつかそれが自分でも本当のように思えてくる」⁵⁶⁾ ように信念、暗示の力は大きく、成功を目指す方向に自己を誘導するのが成功への道だと説く。

ということは、一步間違えれば市場経済によって巨富を得る英雄は暗殺者や連続殺人犯になる危険性をはらんでいる。まだ「2001. 9. 11テロ」が起こる前に、レスラーは殺人犯中に「アラブの英雄になる」幻想を持つものがいることを指摘している。

あらゆる人や国家について「選択の主体性」を無条件で認める上で、実際に市場経済によって巨富を得る英雄が存在する中で、そうした資本主義の英雄たちを暗殺する「暗殺者＝英雄」願望も現れる。そう考えればイスラム教原理主義、キリスト教原理主義といった宗教を考えなくても、社会学的ないし社会心理学的考察だけで「テロとテロ対策」で動く現代社会の構図は読み取れる。

これは、突然話が飛ぶように見えて、実は本質でつながっている、『万葉集』という抒情詩を生み出した我が国の支配階級の感性に対し、柿本人麻呂の「抒情詩」にさえ「刑死説」を唱える「叙事詩的感性」の持ち主である梅原猛が、「ベーコン説」信奉者の猿之助と手を結ぶことと関連付けられる。

あらゆる人や国家について「選択の主体性」を無条件で認めることが幻想ではなくなるには科学技術の存在が大きい。インドを始め科学技術によって成長する国家、企業がアジアで沸騰する背景には、科学技術にはあらゆる国情を無視して成長しうる性質があるからである。十分に科学技術を発展させる素地がありさえすれば、資本主義市場経済を「選択」することが可能になる。本当は一旦資本主義市場経済を「選択」してしまうと、それ以外の選択肢がなくなるのに近いのだが、資本主義市場経済は「選択の主体性」が無条件で認められている幻想を強く抱かせる。これは「体制の選択」が後戻り出来ないことを除いては必ずしも幻想ではない。市場主義経済圏内では商品の開発、販売の「選択の主体性」がほとんど無条件で認められているからである。個人の起業環境を整備し、個人株主の取引も可能にすれば、大企業が個人の「選択の主体性」を奪う可能性も縮小される。

ベーコンは自然科学的認識とその技術が支配する国を想定していた。つまり当時であつてすでに科学技術によって市場経済が沸騰する今日を念頭においていた可能性があるし、アメリカとインドを睨んで東西のインド会社の発展を意識する当時のイギリス社会が、そうした状況に一歩足を踏み入れていたともいえる。

そうした社会像を文学に仕立て上げたのがシェイクスピアではなかろうか。「目と心の社会儀礼」といったものが『ソネット集』に書かれていることは、すぐに思い浮かぶ。「流通する美」といった要素、ウォレスがいう身体機能心理学は『ソネット集』の主題でもある。こうしたベー

56) ナポレオン・ヒル(田中忍訳)、『成功哲学』(産業能率大学出版部,1977), p.55.

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

コンの社会認識をシェイクスピアが文学化する「手口」を明らかにしてくれるのが社会学的視点のシェイクスピア研究ではなかろうか。

『ドン・キホーテ』にも「思い姫」の「目」を何に喩えようかということで「流通する美」の萌芽が見られる。騎士物語のパロディーは封建時代を資本主義感覚で批判したものだから当然である。けれど、『十二夜』でオリビア姫が自分の美を目録で残すことを提案し、ヴァイオラが片想いを夜中の大声のセレナードにたくし、「天と地の間の四元素の中で衰れと思わずば、いたたまれないようにしてやる」という、ベーコンが熱とは分子の活性化によるものとした論文に酷似した表現の情熱は、科学技術による工業化と商品取引による発展の感覚そのものだ。『ドン・キホーテ』の及ぶところではない。

そうした「手口」の成果で「テロとテロ対策」の視点からは『マクベス』の「手が血に染まる」シーンより、リチャード二世の退位シーン、ヘンリー四世、五世の父と子で演じる模擬退位・即位シーンが重要だと思う。

科学技術によって市場経済が沸騰する大競争時代は国家という組織を破壊し、巨大企業が支配する世界規模の大競争社会を生み出したとされる。これは国家だけでなく家族を岐路に立たせている。

もともと「ヘンリー・シリーズは、結局国家や政治から家族と個人に焦点が移っていることを指摘」されずとも、貴族、僧侶が権力争いをする大陸に傭兵を供給する、傭兵と傭兵の留守家族が中心であったイギリスは、家族中心の国であって、イギリスの国力が増せば家族に焦点が当たり、シェイクスピア劇は全体として国家をテーマとする演劇というよりは家族をテーマとする演劇である。国家をテーマとする演劇に一見見える歴史劇、ローマ劇でさえ、登場する英雄たちの家族が描かれたいことはない。

市場経済によって巨富を得る英雄と英雄になりたい願望に対し、資本主義の英雄たちを暗殺する暗殺者と「暗殺者=英雄」願望が並立するのは「テロとテロ対策」で動く現代の社会状況である。それをシェイクスピアとベーコンはすでに予測していたかのようだ。

文芸思潮の社会的表象という、標題どおりエリザベス朝演劇を社会的に捕らえようとし、ヒエラルキーに関心を示して作品分析したもの⁵⁷⁾がある。社会学的な考察は英国が発祥の地かもしれない。しかし、それは伝統的な考察とは違う。それは初めからマイノリティーがメジャーになろうとする圧力があって成立する考察という面があって、米国という競争社会ではその面が強くなる。

こうした社会学的考察で英米を分かつのは、「選択の主体性」であろう。「選択の主体性」が

57) Holbrook, Peter James, *The social symbolism of literary modes in the English Renaissance: social interplay in Shakespeare, Nashe, and bourgeois tragedy*, (1990). 930.25||H69||So

無条件で認められている状態に突入して以後の考察がアメリカであるのに対し、「選択の主体性」が無条件で認められている状態を意識しつつ、国家の残存と国情によって「選択の主体性」が制限される可能性を残しているのが英国ではないだろうか。アメリカは建国さえ「選択」によってなした。英国は建国を「選択」した記憶はない。

シェイクスピアは、社会儀礼とみなせる事柄を場面設定し、そのことで演劇としての効果を高めながら、社会的評価と個人としての生き方のずれを描くとする論考⁵⁸⁾がある。アメリカの競争社会としての個人に対する圧力が反映した論文だと考える。ルネッサンスのレトリックを言葉の社会儀礼と捉える論考⁵⁹⁾もそのヴァリエーションである。

「選択の主体性」を無制限に認められるアメリカ社会から見れば、社会の提供する選択肢を個人が選ぶ、成功を目指すアメリカ人の成長過程とも見える。様々な段階によって成功の階段を昇り、あるいは没落のステップを踏むとき、シェイクスピアのレトリックはナポレオン・ヒルの成功哲学とも、ロバート・ケネディ暗殺者の幻影の言葉とも響く。

この論考から、ここでいう社会儀礼とは、常に改革・意味づけ、劇作化可能な社会儀礼だということに気付く。風土とともに固定された他の民族とは違うアングロ・サクソン独特の社会儀礼かもしれない。そうした社会儀礼が世界の英米化とともに世界に広がりつつある。日本でも古来の社会儀礼を厳密に守るより、時代にあうよう創作された儀礼が盛んになっている。

科学技術の発展と「選択の主体性」を確保した市場経済での繁栄は、しかし英米の独占物ではない。鉄鋼などは未だに日本やヨーロッパに大企業が存在し、アメリカのUSスチールは十位に入るか入らないくらいで、そうした重厚長大産業についてはセイフガードを発令して問題になるような状況がアメリカにはある。ナポレオン・ヒルの『成功哲学』を読めば、あらゆる企業が「選択の主体性」を確保された上で成功する信念を持てば成功するように見える。しかし、鉄鋼などの場合、奈良の大仏という世界最古の巨大な鑄造技術を持つ我が国の伝統にかなわない面がある。

このことと社会儀礼でいえば、ナポレオン・ヒルの『成功哲学』が出版された七十年代、まだ高炉などの中で起こる化学反応の実態が解明されていない部分があった。解明されないままになぜか鉄が出来上がる。それは神主に似た装束の先人が伝承した技術がまだ生きていたことになる。『もののけ姫』の「たたらを踏む」製鉄技術の世界であった。

そのことを念頭に、もう一度科学技術の発展と「選択の主体性」を確保した市場経済での繁

58) Giese, Loreen Lee, *Denied identities: social rituals in selected Shakespearean drama*, (1991). 930.28||Sh||Gie

59) Sawin, Sheryl Drobny, *Ritualizing the Word: Renaissance Dramatizations of Eloquence*, (1994). MF||189||22

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

栄を考えると、すべてについて透明性を要求するアメリカばかりが繁栄するわけでもないし、アメリカの繁栄の主力は、必ずしも万人に平等にチャンスを与えられて透明性のある競争によって勝ち取られたともいえない、石油王を生む石油利権であることも視野に入ってくる。

さらに「社会学」という学問自体、こうした世界の英米化とともに存立する学問のようにも思える。神主に似た装束の先人が伝承した技術が、科学的に解明されないまま、まだ工業生産の中心で生きていた七十年代に鉄鋼産業の発展で奇跡の復興から世界第二位の経済大国にのしあがった我が国について、あらゆる建設現場、技術開発現場で、神主を招き起工式を行う社会的儀礼を、社会学はどう捉えるのであろうか。

「選択の主体性」が無条件で認められている状態を意識しつつ、国家の残存と国情によって「選択の主体性」が制限される可能性を残しているのが英国だとしたら、我が国は「選択の主体性」が無条件で認められている状態を生み出す科学技術そのものの中に国家の残存と国情によって「選択の主体性」が制限される可能性を残していて、その国家が必ずしも近代国家ではなく、古代国家の残影さえあるということになる。

それは我々日本人が意識しないことを欧米人が敏感に感じ取っているともいえる。例えば安藤百福（カップヌードルの創始者）の死に際しての欧米メディアの報道ぶりに接し、調べてみると欧米メディアの扱いは松下幸之助とほとんど同じであり、カップヌードルが何か神秘的な発明として報じられていることにも気づく。そしてロンドンのハロッズといった高級百貨店の食材コーナーに日本のカップヌードルやカップ麺が陳列されている不思議さを連想させる。

あらゆる建設現場、技術開発現場で、神主を招き起工式を行う社会的儀礼を、技術開発の不安を取り除き「科学技術の神」の加護を願う行為としたら間違っているだろうか。文系、それも社会学的な考察をする学者、文化人の多くは神道を戦争指導の国家体制、右翼思想といったものと結びつける。しかし、現場の工事関係者が、そうした右翼思想の加護を得て技術開発をする意識があるとは思えない。先述の「日本風合理主義の守護神として働く神道」という考え方から、英国教会に似て、ともすれば科学と対立しがちな宗教の中で、むしろ科学技術保護を可能にする宗教の側面を見てもよいのではないか。皇室関係者のオックスフォード大学留学が多いことも、似た「国教」の交流を示唆するのではないか。

ベーコンなどの知的サロンがある英国に始まりアメリカが受け継いだ科学技術の発展は、社会に「選択の主体性」が無条件で認められている状態をある程度確保し、透明性の確保されたルールにのっとって競争をし、成功を目指すことを世界に普及させた。その「科学技術」と、日本の神道形式の起工式が自然な形で調和する日本の「科学技術」とは、少し質が違うのではないかと考えさせられる。

こうした問題を眼前に分かりやすく展開してくれるのが猿之助・梅原猛の「スーパー歌舞伎」ではなからうか。「ヤマトタケル」は「米と鉄の力」で我が国を支配した大和朝廷を描き、人

望と戦争に勝つ能力で造反地域を平定した英雄ヤマトタケルが、個人としては悲劇の最期を迎える結末になる。我が国の建国神話という「宗教ヴィジョン」を「叙事詩的感性」で解説してくれる作品になる。

かつて玉三郎がマクベス夫人を演じデズデモーナを演じ、二代目松緑がオセロを演じた舞台が、ヤン・コットによっても評価された記憶から、では「スーパー歌舞伎」でシェイクスピアを演じたらどうなるかを考えてみたくなる。シェイクスピア=ベーコン説を志向し、ハムレット=ドン・キホーテ説も視野に入れる、まさに米国学位論文の解釈が舞台で実現するのではないかと思う。

『マクベス』を考えれば、王位を狙ったマクベスが、ダンカン王殺しによって王位につき、王権維持のために邪魔者を消す血の川を渡り、やがてマルコムの変乱を受けて滅びるという、権力闘争とスコットランドの「建国神話」的側面であれば、「スーパー歌舞伎」の「叙事詩的感性」の方が、普通の歌舞伎役者と新劇の役者でつくる舞台より、あるいは要領良く舞台化できるかもしれない。『オセロ』についても、イスラム教徒との戦いの中で、駆け落ちで結ばれた將軍の恋をイアゴーが陰謀で陥れる筋を、キプロス島の支配権をめぐる争いととらえれば、「スーパー歌舞伎」の「叙事詩的感性」の方が分かりやすい舞台をつくれるかもしれないと思う。

しかし、そうした舞台を思い浮かべたとき、例えば玉三郎が活躍する余地がないことに気づく。狂気のマクベス夫人の悪と美の魅力、駆け落ちする勇気を持ちながら運命を甘受する普通の女性としてのデズデモーナの魅力を表現するといった、余人では替え難い演技力が生かされない。「スーパー歌舞伎版シェイクスピア」で恋を用意するなら、『マクベス』ではマクベスをやっつけて王位につくマルコムに清らかな伴侶を用意し、『オセロ』ではビアンカを酒場の女とせずキャシオと清い恋をする相手にして、キャシオをイアゴーと戦い勝利するもっとうっかりした英雄にすべきということになる。

「スーパー歌舞伎」では英雄と英雄を支える清らかな恋しか描けないのだ。

その構造を明らかにするため、今度は「スーパー歌舞伎」の「ヤマトタケル」を普通の歌舞伎にするとしたらと考える。普通の歌舞伎には掛け声の設定が必要である。「スーパー歌舞伎」には掛け声がない。普通の歌舞伎なら、例えば草薙の剣の由来を言うところなどに掛け声がかかる。ただし、「これが草薙の剣の由来です」といった「スーパー歌舞伎」の説明調では、情感がなく掛け声の掛けようもない。「草薙の剣ってやつは、因果なものよなあ」といった台詞を用意し、「草薙の剣ってやつは」の後に間をおき、そこで「成駒屋！」といった掛け声がかかり、「因果なものよなあ」が決め台詞になる。

では「草薙の剣ってやつは、因果なものよなあ」という台詞を「スーパー歌舞伎」に設定できるだろうか。こうした設定をするには、ヤマトタケルにまつわる建国神話そのものという、とってつけたような「スーパー歌舞伎」の舞台設定では不可能で、例えば江戸の侠客の集団

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

の縁起ものとして、日本の建国神話に似た状況があつて、侠客集団の長に誰になるか、なればなつたでお上ににらまれ・・・といった屈折した状況を考える必要がある。普通の歌舞伎の「英雄」は侠客（女性なら遊女）のような陰と屈折が必要なのだ。そこで演技を鍛えた名優であれば、他のジャンルに進出が可能となる。

こうした考察だけなら普通の歌舞伎の方が「スーパー歌舞伎」より上であつて、「スーパー歌舞伎」では出来ない複雑な筋と役造りが出来るし、いざとなれば名優をそろえて「ヤマトタケル」でも「オオクニヌシ」でも「スーパー歌舞伎」よりすぐれた舞台をつくってみせると豪語出来そうである。

あるいは二代目松緑や先代の松本幸四郎が生きていた時代なら、そうしたことが言えたかもしれない。現在の普通の歌舞伎の場合、「英雄」を演じられるカリスマ性のある立ち役がないのではなかろうか。

これは、たまたま現在いないといった偶然の問題ではなく、第二次大戦の影響だと考えた方がよいのではないか。二代目松緑や先代の松本幸四郎は戦争を体験した世代であり、実際の戦争で軍司令官が持つた、あるいは持たねばならない「英雄」としてのカリスマ性を知っている。また昭和天皇は実際に「大元帥陛下」として君臨した。今はその種類のカリスマ性が否定される時代になっている。

考えてみれば「スーパー歌舞伎」をあみだした猿之助も梅原猛も同じく実際の戦場での「英雄」を知っている世代である。同じ戦争体験を舞台に生かす、その生かし方が普通の歌舞伎と「スーパー歌舞伎」では違ったことになる。

普通の歌舞伎では「英雄」を演じられる役者が姿を消したらそれで終わりなのに対して、「スーパー歌舞伎」は、さしてカリスマ性のない役者でも「英雄」を演じられる「装置」を発明したといえる。

歌舞伎の門閥制度を批判し、誰でもが歌舞伎を演じ「英雄」を演じる立ち役をつとめられる「装置」である「スーパー歌舞伎」は、「選択の主体性」を誰にも認めるアメリカ社会に似ている。これに対し普通の歌舞伎は門閥制度を維持し、「英雄」を祭るヴィジョンを同時に否定しながら「英雄」であるといった、極めて複雑な江戸市民社会の、侠客、遊女を中心にした屈折した綱渡りの舞台を演出する。「インテリの宗教」と大衆性を同時にかねそなえる舞台をつくる英国演劇に似ている。

さて普通の歌舞伎では「英雄」を演じられる役者が姿を消したらそれで終わりとして先述したことについて、松本白鸚（つまり八代目松本幸四郎）について語る必要がある。大石内蔵助を演じて人間国宝となり、『鬼平犯科帳』の鬼平は八代目をイメージして書かれたともいわれる。典型的な「英雄」としてのカリスマ性がある歌舞伎役者であった。

息子の九代目は『ドン・キホーテ』をミュージカル化した「ラマンチャの男」（八代目が評

価した作品)でドン・キホーテを演じ一世を風靡している。父親のような「英雄」としてのカリスマは感じられないかわり、スペイン黄金期の作品群とシェイクスピアを比較した先述の論点との関連で興味深い問題を提起する。

キャリバンがもしアングロ・サクソン人の蔑視を加味した植民地ネイティブ像だとすれば、スペインはカトリック信仰が前提になっているので、統治能力といった政治的配慮は度外視され、信仰を外れたら怪物になる人間存在が、悔い改めれば英明な王になるという荒っぽい人間観になっていると先述した。

荒っぽいというのは政治的配慮をするイギリス側からの見方であって、そもそもカトリックの信仰の場合、信じるか信じないか二つに一つで中間はないし、植民地ネイティブへの差別意識は征服者が被征服者に奴隷の主人として君臨している意識であり、信仰のたがが外れると怪物になる残酷さを発揮して統治していることは残酷な統治者自身意識している面がある。怪物になったり真人間になったり、極端を行き来するカトリック教国の植民地支配は、はじめから長続きするはずもない。

これに対し、イギリスの植民地統治は、はじめから政治の次元のことであって、植民地を長く統治し、植民地政策に反抗する原住民をむしろ自ら育て(ガンジーはイギリスで弁護士をした)、ゆっくりと植民地を手放していった。

極端を行き来する信仰次元の支配か、妥協を知り、統治の困難を知る政治次元の支配かの差が、「ラマンチャの男」で見取れる。

「ラマンチャの男」での九代目松本幸四郎の演技は、最後の臨終シーンで最高潮に達する。夢覚めて、自分が遍歴の騎士ドン・キホーテではないことを悟り、静かに息を引き取ろうとするとき、突如、「いかん、病気などしている暇はない」と悪を懲らす遍歴の使命感を取り戻し、起き上がって、やがて命果てる。平凡な田舎郷土と、夢を抱き正義感に満ちた遍歴の騎士を行き来する演技は、極端を行き来する信仰次元がベースにあるスペインの環境から生まれた。

これを日本の「英雄」としてのカリスマ、まさに夢を抱き正義感に満ちた日本版遍歴の騎士を演じて最高の存在であった父親の演技を受け継ぎ(演技の技術だけなら九代目は八代目に劣らぬ域に達している)、時代が時代なら同じく内蔵助など日本の「英雄」を演じてその内容で評価されたかもしれない歌舞伎役者が演じると、戦前、戦後、昭和初期まで、まだ日本にも「英雄」としてのカリスマが生きていた頃、日本は妥協を知り、統治の困難を知る政治次元の国ではなく、何がしかの信仰に似た、清らかな心を愛し、天皇を敬愛する、その意味で信仰次元の支配を好む民族であったことを考えさせる。

ここで、怪物のように欲情を肥大させる存在は、カルデロンの『人生は夢』と、シェイクスピアの『テンペスト』の、それぞれセヒスムンドとキャリバンになると先述したことを信仰次元と政治次元で捉えなおそう。セヒスムンドは王になるという意味で英雄伝説的な面を見せる。

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

我が国のスサノオがヤマタノオロチを退治した伝説も怪物退治と国家樹立が結びついている。信仰次元の支配が裏にある政治神話ともいえる。

キャリバンはイギリスの植民地統治という政治次元の政治ではないか。これは、暴動を起こしやがて平定される被征服民そのものを怪物の比喻で表すのではなく、暴動という現象を怪物視することにもつながる。暴動を起こす民衆が怪物なのか、暴動という現象が怪物なのかで、「信仰次元の支配を好む」か「政治次元の支配を好む」かが、国柄として分かれるのではなかろうか。

これは次項で論じ、アメリカが「信仰次元の支配を好む」か「政治次元の支配を好む」かも考えてゆきたい。

(c) 政治に関わるもの

イギリスの民主主義とアメリカの民主主義の関係が深層心理的に考察できるような論文がある。

レイプされた女性の嘆きが共和国設立につながるという奇抜な発想の論考⁶⁰⁾で、レイプで泣き寝入りせず、十分な考察と自立の精神があって自殺するルクリースの言葉を、市民の自立を保障する共和政治の原点ととらえるものである。平行してシェイクスピアが長詩を捧げたサウサンプトン伯爵との関係も考察する。騎士の勇猛果敢な反面、現代的にいえば人権無視につながる乱暴さと、女性や子供にも配慮する庶民感覚との対立から、民主主義の原点を考え、そこからローマの共和制への考察をするのは、アメリカならではの発想だと考えられる。

ただし、共和制か皇帝独裁かというローマ帝国についての議論は、キリスト教が国教になって以後、聖権と俗権が持ちつ持たれつで政権を維持してきた大陸ヨーロッパの伝統に立つもので、前項で議論したイギリス型の民主政治ではない。かといって、アメリカをイギリスと対立する十六世紀スペインのような「信仰次元の支配を好む」国と看做すのも適当ではない。

むしろ日本なら今なお「信仰次元の支配を好む」体質は続いているといえるかもしれない。終戦までは天皇の「聖断」という言葉が使われるように、立憲君主制でありながら、日本は聖権と俗権が複合されたような性格を持ち、憲法は、戦前の体質を「より民主的」に改めた信仰個条のような趣があって、それゆえに改憲を阻止し、それも一言一句変えてはならないという意見が多く聞かれることにもなっている。

アメリカについて、その支配体系が聖権と俗権が複合された面を持つか、アメリカについての聖権とは何かといった議論は稿を改めることにして、ここでは、アメリカが「信仰次元の支

60) Murray, Vicki Elizabeth Joan, *Shakespeare's "Rape of Lucrece": A new myth of the founding of the Roman Republic*, (2003). CR||291||1

配を好む」体質だとは言えないことを指摘したい。憲法修正をあれだけ繰り返したという一事でもって、それは言える。

アメリカを議論するには、「信仰次元の支配を好む」か「政治次元の支配を好む」かで来た議論は、「理念先行の支配を好む」か「実効支配を尊重する」かに言い換えて議論する必要があるのではなかろうか。

ここで、「信仰次元の支配を好む」体質と「理念先行の支配を好む」体質の微妙な差について考えておきたい。

スペイン黄金期の劇作品で、『フォンテ・オベフーナ』（1612?）というロペ・デ・ベガの作品がある。領主の圧制に町が反抗し、領主を殺し、子供まで拷問にかけられても下手人を言わず、下手人は「フォンテ・オベフーナ」だと唱え続け、国王の裁可で証拠不十分で赦される話だ。

不満を持つ民衆の革命的な勝利を描きながら、カトリックの殉教に似た感覚がある。つまり子供まで拷問にかけられても下手人を言わず、下手人は「フォンテ・オベフーナ」だと唱え続けるのは、日本で殉教したキリシタンが子供まで十字架にかけられても最後まで賛美歌を歌い続けたといったことを想起させる。

「信仰次元の支配を好む」体質では、カトリックのような幼時洗礼を基本とするキリスト教の場合、汚れなき心が尊重され、そこに人々が終結して圧制に立ち向かうことになる。「子供のような素直な心」が尊重される日本にも通う面がある。それは、逆に「大人への成長」があまり尊重されないことにもなる。

イギリスでは人格、知性ともに成長が期待され、英国紳士の支配を許してきた。先述のように英国教会は「インテリの宗教」であって、人格、知性ともに成長した「大人の」聖職者が英国の国家の聖権的な側面を担う。素直な心の子供の賛美歌を殉教の柱にすえるような好みはない。

イラク派兵の是非によってアメリカ大統領の支持率が上下する。こうした為政者の支持率は市場で商品が売れ筋かどうかということに似て、政治の市場経済化がいわれて久しい。一方マイノリティーの立場で直接政治を左右できない層による暴動なども起こるのがアメリカの政治である。

その場合、反抗する相手が「人格、知性」を前面に出し、その支配を許しつつ反抗するので「資本主義に反対するデモ」といった屈折した反抗になるイギリスと違い、反知性運動が許されるアメリカでは、直接、利害のみで暴動が起きる。

我が国でも似た現象があって、先進国共通の若者による小さな暴動が成人式など現代の「社会儀礼」の際に起こる。また若者の暴動の場合はイギリスでも「知性、人格」は反抗する相手の問題としても、自分たちの問題としても無関係になり、半ばゲーム化した資本主義の非人間

的な側面への反抗なのか、若者の暴動は昨今先進国共通の現象になっている。あるいはもはや国家という枠を超えた現象と捉える必要があるかも知れない。

『ヘンリー四世』第一部を、ヘンリー四世の軍事力と知力、ホツパーの軍事力、ハル王子の軍事力と政治力の三つの方法による政権奪取劇として分析する論考⁶¹⁾がある。政権奪取には地図が重要であることも分析。イギリスという継続した国家内での政権争いというより、普遍的な政権奪取方法の違いをとらえる。従ってハル王子の成長といった観点はない。旧世界では、国家の枠内の政権争いと、国家の枠を壊すことを峻別する。米国は、アメリカという国家の枠をそれほど意識せず、政権争い、政策の違いはすぐに国家の枠を超える。イラク戦争で、イラクという国家の枠を壊してしまって、すぐに政権が打立てられると思うのは、そのせいではなからうか。

ただしシェイクスピア時代にも、例えば「暴動の鎮圧」ということは、本来国内問題のはずが、やがて世界に乗り出し大英帝国を築く英国では、微妙に国際問題化しそうなニュアンスもおびていた。

リチャード二世の退位シーン、シェイクスピアの『ペリクリーズ』、スペンサーの『フェアリー・クイーン』など文学作品のイメージ、当時のスコットランドやカトリック教徒といった英国の体制を脅かす勢力の反逆や反逆を正当化する考え方と結びつくことを論考し、「巨人」という語がフランシス・ベーコンの著作でも暴動を表すことなども論じるもの⁶²⁾がある。

「巨人」という語はエッセイズの中では詩人の名声とも結びついて論じられる。あるいはシェイクスピアの『ハムレット』で、ハムレットの人気を気にしてクローディアスが公然とハムレットを処刑できない場合の「人気のある人物を処刑しようとしたら抗議に押しかける群衆」も、当たりを取る人気劇作家で詩人であるシェイクスピアその人のファンや劇場の観客も、ベーコンにとっては「巨人」であったのかもしれない。一説にはハムレットのモデルともいわれるエセックス伯爵の処刑では、その人気の動向を気にしながらベーコンは罪状の記述を操作した。その報酬としてエリザベス女王から金を受け取った。それを俗物視する視点がシェイクスピアの『ハムレット』にはある。

ここに、「巨人」と怪物を同じような表現と看做せば、暴動を起こす民衆が怪物なのか、暴動という現象が怪物なのかで、「信仰次元の支配を好む」か「政治次元の支配を好む」かが、国柄として分かれるのではなからうかと先述したことが関係する。

それを論じるために、ベーコン、黄金期スペイン文学とシェイクスピアの関係について確實

61) Judd, Amy C., *Who's got the map? Shifting constructions of kingship in Shakespeare's "Henry IV, Part I"*, (2003). CR||291||1

62) Jensen, Phebe, *Literature and Political Authority in Early Modern England*, (1995). MF||189||69

なことを考えておきたい。

シェイクスピア=ベーコン説を文字通り認めることは出来ないにせよ、ベーコンを中心とした近代自然哲学で、後に近代自然科学に発展した考え方を醸成したインテリグループとシェイクスピアとに接点があったであろうことは確実だと思われる。一方、カルデロンなどスペイン黄金期の文学者とシェイクスピアとの間に直接の接点があったとは考えにくい。けれどスペイン、ポルトガルから様々な職業の人々がイギリスに来訪したであろうことは想像出来る。スペインを強調しなくても民間レベルではイギリスを含めヨーロッパ共通の演劇、芸能、小説の、流行、テーマがあったと考えても不自然ではない。

シェイクスピアとスペイン文学の共通点として、諷刺表現の多用、人間の身体を目や顔などに分け恋人の女性の美を描くこと、中世の騎士道を賛美したり抑揶したりすることなどが上げられる。カール・R・ウォレスという人が書いた『人間の性質について語るフランシス・ベーコン——人間の魂の機能』(1967)⁶³を引用し、ベーコンの心についての考察は「心を含む身体機能心理学」(faculty psychology)の歴史に残るものと先述したことを合わせると、中世から近代への変わり目に際し、文学のテーマとして騎士道がもはや同時代のものでなくなり、その恋愛表現に「心を含む身体機能心理学」(faculty psychology)が導入される近代自然科学時代の曙があったと考えてもよいのではないか。諷刺表現についても、一つ一つの諷刺表現が独立していれば、そこに「近代」は感じられない。諷刺表現が多数表れると、人生観を体系だったものにしようとする、近代哲学へ庶民の知恵を取り込む動きが感じられる。常に神を意識するキリスト教の信仰、神学から、庶民の英知と、宗教とは別の、庶民による人生の知恵を集合させようという努力に感じられるからである。それはベーコンの、学者の学問と職人の知恵を合一させる「知は力なり」に呼応する。

まず、シェイクスピアは作品に「スペインの情熱」と「ベーコンの客観性」を導入したといえる。ただし「スペインの」という形容詞は特にシェイクスピアがスペインにこだわったということではなく、ヨーロッパ共通の宗教、哲学の変革の中で、スペインがたまたま「情熱」において突出していたからではないか。また「ベーコンの」という形容詞もヨーロッパ共通の思潮である神学から哲学、自然哲学から自然科学への流れの中で、ベーコンを中心としたインテリグループが「近代的客観性」において突出していたからではないか。もちろん、後にニュートンを生み、ニュートンが国葬になったのに対し、それがポルトガルなら火焙りになっただろうとヴォルテールが書いたように、英国に「近代的客観性」に向かう思潮保護の姿勢があったことは確かだ。また「情熱」がスペインのように常にイスラム教との戦いを強いられる環境にあっては、カトリックの信仰に裏打ちされた「情熱」ということになる。そのため、逆に「情

63) Wallace, Karl R., *Francis Bacon on the Nature of Man—The Faculties of Man's Soul*, (1967).

熱」は「反科学」的な「情熱」になる傾向を否認しない。

これを踏まえ、エセックス伯爵に対するシェイクスピアとベーコンの違いを考えてみよう。

七十年代にシェイクスピアと言語不信論が流行ったことから説き起こし、プラトニックとソフィスティックの区別も援用して、喜劇を論じるもの⁶⁴⁾がある。一見学際的考察とも西ヨーロッパの文化伝統にたったものともみえるが、七十年代の体制批判がベースになっている点から本項目に分類したい。七十年代とは大学紛争という政治の季節であった。

先述した「巨人」という語がフランシス・ベーコンの著作でも暴動を表すことと、この論文が論述する七十年代の体制批判とは、一見無関係のようで、ベーコンとシェイクスピアの関係を示唆してくれる。これは旅の教訓といった諷刺的表現で説明出来る。

「誰の言うこともよく聞き、あまりしゃべるな」(Give every man thy ear, but few thy voice;) (『ハムレット』一幕三場) という旅に出かける息子のレイアティーズにポローニウスが忠告する場面がある。この場面はレイアティーズが妹のオフィーリアにハムレットに構うなと忠告するところで始まる。

一方ベーコンには「旅について」というエッセイがあって、旅に出かける若者への忠告が書かれている。喧嘩に巻き込まれるなということから始まり、帰国後旅行談をべらべらしゃべるより質問に答える形で旅の体験をにじませろといったことなど、ポローニアスの忠告とほぼ同じことが書かれている。異国体験を生かしながら外国かぶれになるなというベーコンの趣旨を、もう少し庶民的にしてシェイクスピアはポローニウスに語らせる。

「喧嘩に巻き込まれるな」(Beware Of entrance to a quarrel,) は同じでも、「一旦巻き込まれたら相手がお前を警戒するようになるほどやれ」(but being in, Bear't that the opposed may beware of thee.) というのが、ベーコンとは違うシェイクスピアのポローニウスである。手近な処世訓しか考えない庶民であるポローニウスと、国家を考え国のアイデンティティーを考えるエリートであるベーコンの違いと言える。同時に「近代的客観性」とは違う「情熱」の存在が感じられる。

このポローニウスはハムレットに殺されてしまう。ハムレットは国家を考え国のアイデンティティーを考えるエリートであろう。しかし、ポローニウス、ハムレット、ベーコン、シェイクスピアの四者はどういう関係にあるのだろうか。

「七十年代にシェイクスピアと言語不信論が流行ったこと」はハムレットがポローニウスを殺したことにつながる。七十年代、バランスの取れた大人の態度は胡散臭く思われ、若者たちから糾弾された。この若者たちの心理は、「情熱」に基づくもので、カトリックが殉教で好む、

64) French, Tita, *A rhetoric of comedy: essays on language as a theme in Shakespeare's comedies*, (1985). 930.28||Sh||Fret

子供が拷問にかけられても棄教せず、十字架の上で賛美歌を歌うに通じる、世知に汚れていない真摯な態度尊重の姿勢が感じられる。

一方「巨人」という語がフランシス・ベーコンの著作でも暴動を表すことはあったとしても、シェイクスピアの場合は必ずしも鎮圧側の感覚ばかりでない。例えばヘンリー・シリーズの内乱の中で起きる民衆の反乱のように、シェイクスピアの芝居にとりこまれると、「支持する」「支持しない」というより客観的現象として「重要視する」感覚で捉えられる。ジャック・ケイドの反乱などの取り扱いとして、ケイドの反乱を「支持する」立場が作者にあるとは思えない。「支持しない」と言い切って鎮圧するのが良いとするだけではない。つまり、ベーコンのような「近代的客観性」ばかりともいえない面がある。ヨーロッパ共通の庶民感覚に基づく「情熱」が控えていて、人間の営為としての反乱を、やや同情的にみる要素が皆無ではない。

シェイクスピア作品にはベーコン的な「近代的客観性」「大人の感性」とシェイクスピア特有の「情熱」「真摯な感覚に拍手を送る態度」が混在している。

歴史劇の扱いは、総じて国家の安寧を考える大人の感性である。この「大人の感性」は悪くいえば俗物という表現も出来る。ポーニアスは俗物、ベーコンは大俗物で、そこに狂気に至るほどの真摯さを追及するハムレットと、そういうハムレットを造形した詩人シェイクスピアが対峙するという図式が一つ考えられる。

ここで国家の安寧を考え、ときに人気がある反乱者の処刑について罪状の記述を操作し女王から報酬を得たらなぜ俗物視されるかを考えてみる。ベーコンが国家を考えると、まずラテン語の文献に書かれた古代ローマがあって、偉大な理想国家を求める気持ちがあって、自分が国政を担当しているイギリスを考える。

シェイクスピアの場合、ラテン語の文献に書かれた古代ローマを参考にすることは同じでも、偉大な理想国家を求める気持ちがあるというより、理想を求めたり個人的に権力の伸長をはかったりする、それぞれの権力観をぶつけ合う人間ドラマを読み取りたい気持ちの方が強いと思う。イギリスについても、自分が国政を担当していると言うより、ときどき国家からの締め付けにあう反発もないわけではない人間と国家とのぶつかり合いが関心の主なものではなからうか。

分類項目「(a)フェミニズムに関するもの」で指摘したことを繰り返せば、ベーコンのエッセイなしには、そこまで当時の宮廷政治、議会政治、軍隊の派遣状況などに立ち入る立場ではないシェイクスピアが作品を残すのは難しかったであろう。シェイクスピア作品にはそうした「ベーコン部分」とベーコンには書けない、詩人シェイクスピアの面目躍如という「シェイクスピア部分」がある。それは「愚かに愛した」オセロの行動が観客に与え、その他器用に振舞えない英雄が観客に感動を与える部分である。実際の政治で器用にエセックス伯爵を葬り去ったベーコンは、あまり良くは扱われないのが演劇というものでもある。

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

「シェイクスピア部分」と「ベーコン部分」の対立には、論じてきた「情熱」と「近代的客観性」の対立がほぼ対応する。諷刺的表現を多用する世知に長ける要素は両方に共通し、シェイクスピアはヨーロッパ全体の庶民感覚（「ヨーロッパ全体」を強調するのは、ヨーロッパ共通の演劇、芸能、小説の、流行、テーマを巧みに取り入れたことで、同時代のユニヴァーシティーウィッツとは違う作品を生み出したと考えられるからである）を持ち、ベーコンは特にイギリスのインテリに近い層の「世知」を有している。

こうした「政治」の観点でながめると、米国博士論文は、見事なほど、シェイクスピア作品の「ベーコン部分」に反応し、「ベーコンとは違うシェイクスピア部分」は切り捨てないまでも、最小限に留めている。

犯罪学の立場から、作品の中でシェイクスピアが取り扱った「犯罪」を分析し、『尺には尺を』の正義と慈悲の関係を中心に、窃盗、自殺などまでを取り扱う論考⁶⁵⁾がある。その結果当時の英国の法と秩序感覚が歴史的、社会的にみて正確に作品に反映されていることをいう。ベーコン説を云々する論文ではなく、文学ではなく犯罪学での分析は、データ収集、その取り扱いにかなり厳密な客観性をめざす。それだけに、かえってシェイクスピアがベーコンの著作に関心があったことの強い状況証拠にも思われる論考である。その関心があまりに専門的に見て正確であることから、シェイクスピア=ベーコン説の補強になりそうである。

「欲望の政治学」として登場人物の君主の戦争責任論のようなものを展開する論考⁶⁶⁾や、歴史劇の「未来」=変化とする論考⁶⁷⁾などは、米国の現実の政治を反映して、競争社会の政治そのものを表している。歴史劇、シドニーの作品をマゾヒズムの観点で解析した論考⁶⁸⁾は、臨床心理学的ながら、歴史全体に臨床心理学的であろうとするスケールの大きさは、むしろ政治を語るものではなからうか。

ただし我が国には「判官びいき」の伝統があり、シェイクスピアも「不器用にふるまって悲劇に終わる英雄」に観客が共感する芝居を書いた。これに対し、上記米国学位論文によれば、源義経などはマゾヒストの極になってしまう。アメリカが競争社会の価値観に常にさらされ「判官びいき」は「負け犬びいき」とみなされてしまうゆえではなからうか。

そこには国家ともインテリとも一体化しないアメリカ独特の民衆感覚があって、強いてシェ

65) Time, Victoria M., *The Fictional Criminal: An Analysis of Selected Shakespearean Plays*, (1997). MF||198||7

66) Song, Chang-seop, *The politics of desire: William Shakespeare's "history" and the question of subjectivity in "Richard III", "Richard II", "Henry IV", and "Henry IV II"*, (1993). 932|Sh||R3=So

67) Hartley, John David, *Shakespeare's Concepts of the Future in the Tetralogies*, (1995). MF||189||8

68) Ellis, James Richard, *Architectonics of the Self: Negotiating Male Subjectivity in Elizabethan Narrative Poetry*, (1995). MF||189||10

イクスピアと同時代の文学とを照合させれば、スペイン黄金期文学の主役である民衆に近い感覚ではなかろうか。

チャールズ一世と議会の対立と、シェイクスピアやジョンソンのローマ劇とを対比させ、アメリカ=古代ローマ帝国をアメリカ建国時の感覚で語るのなら適当と思われるが、イギリスの王権分析には少し違和感がある論考⁶⁹⁾がある。これも語りたいのは米国の政治だと考えられる。プロスペローの筆折に関して著者論議から政治論に及ぶ論考⁷⁰⁾もそのヴァリエーションとみなせる。

政治の舞台から去り行く者への愛惜の情がなくもないけれど、「判官びいき」は絶対にはないアメリカの感覚はすべてに共通している。

『タンバレン大王』『オセロ』といったイギリス・ルネサンスの作品の東洋趣味とオスマン・トルコなどの実際の東洋を比較考察する論文⁷¹⁾がある。作品の東洋趣味は、ヨーロッパからみた、ヨーロッパ自身の自己イメージ(帝国構築願望, ヨーロッパ精神の危機)という側面があることを指摘する。

『嵐』について、テキストを分析し、バークがフランス革命を演劇として捉えた観点や、現代の『嵐』論考などを通じて、政治との関わりを強調しつつポスト・コロナリズム的、脱構築的論考⁷²⁾をするものがある。

いずれも様々な勢力の拡大、縮小を冷徹にとらえ、権力の栄枯盛衰自体に注意を払いつつ、英雄への愛惜の情も無常感を感じることもない分析になる。

『ハムレット』のガートルードをエリザベス一世になぞらえた理解を、シェイクスピアを高校のクラスで教える際に適用し、ハムレットをエセックス伯にすればエセックスをハムレットのモデルとする考え方になるところを、ハムレットは英国全般とする論考⁷³⁾がある。同じエリザベス一世をガートルードとする論考でも、エセックスの取り扱いがアメリカの場合女性リーダーのセックスキャンダルになって女性リーダーの資格を失わせるのかもしれない。英国の女王であれば男性との恋の噂も統治の手段になる。「騎士とお姫様」の関係の政治性(つまり庇護される立場を残して国のリーダーになる)はアメリカでは実際の政治分析で理解され

69) Gu, Zhen, *Roman History Plays: Critique of Royal Absolutism*, (1995). MF||189||15

70) Ross, A. E., *Shakespeare's "Tempest" and the issue of authorship in the renaissance*, (1995). MF||189||23

71) Boerth, Robert, *Disorientations: The Matter of the East in English Renaissance Drama*, (1995). MF||189||74

72) Mitra, Udayan, *"In this Last Tempest": Reading, Re(-)creation, Re(-)presentation and the Politics of Shakespeare's Text(s)*, (1995). MF||189||70

73) Brunner, Tracy Anne, *Using a new historical approach in the Shakespeare classroom*, (2003). CR||291||1

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

にくいのであろう。『王冠と恋』で有名なこの事項が一顧だにされない。

そもそも日本の観客はハムレットに対してある種の「判官びいき」的な感覚を持つ。もしハムレットのモデルがエセックス伯爵なら、実際のエリザベス朝政治にあった「判官びいき」的な感覚をシェイクスピアは芝居に書き込み、ベーコンは、注意深く、「判官びいき」的な感覚を消し去り、エセックス伯爵の影響力を政治の舞台から消した。

アメリカは政治感覚的にはまさにベーコンの子孫であって、ベーコンと同じく、この論文の著者はエセックス伯爵を論考から消してしまったのだ。これは考えてみればシェイクスピアをイギリス文学としてではなくヨーロッパ文学として捉える傾向にあるアメリカの学位論文としては当然のことかも知れない。

ヨーロッパ文学として捉えれば、エセックス伯爵は現実に存在した『ドン・キホーテ』のイギリス版に過ぎない。いくらか騎士道の世に憧れ、エリザベス女王を「思い姫」にした存在など、さして珍しくもなく、ヨーロッパ文学の中でシェイクスピアが特徴的なのは、むしろ「ベーコン部分」だということになる。

アメリカが政治感覚的には「ベーコン部分」に着目するということを考察するのによいと思われるのは次の論考である。

すなわち性的な関係の不安定さと政治の関係を論じる論考⁷⁴⁾がある。『アントニーとクレオパトラ』でアントニーがクレオパトラへの情に溺れ政治的、軍事的に失脚したことを言うなら分かりやすいことながら、シェイクスピアの『ソネット集』からポーモント、ミルトンからドライデンまでを論じる。その出発点は『ソネット集』の中の政治に関する言葉を比喻とはとらず、真っ正直に政治のことと解釈することから来ている。これは米国学位論文の文学論としての資質を問うことになる。国家と一体になった政治家、軍人、インテリが存在して、これらも人間である以上恋愛や色恋沙汰は不可避なので、それが独特の展開を見せるということを理解しないのではないか。国家と一体になる存在を認めず、あくまで民衆として「仕事」と「色恋沙汰」を峻別することしか考慮出来ない感覚なのだ。

この論考のように「エロス」を性愛の意味にとるのは一般的な英語感覚であるにしても、シェイクスピアを論じるときギリシャ・ローマの古典の背景を考慮せず、ミルトンからドライデンまで、性愛と関係ありそうなものを、すべて「エロス」の語で拾い集める荒っぽさは旧世界の文学研究者の感覚とは異質である。民衆感覚での「色恋沙汰」という意味で考えているとしか思えない。

だからといって、この論考に価値がないわけではない。『アントニーとクレオパトラ』に描

74) Denman, Jason Robert, "Crowning the present": Eros, temporality, and the problem of governance in seventeenth-century English drama, (2003). CR||291||1

かれた世界とエセックス伯爵, エリザベス一世, ベーコンをめぐる政治的關係, ミルトンが『失樂園』を生む清教徒革命に至る政治状況, そしてドライデンの作品と王政復古期の政治状況を, 作品と時代背景という形ではなく, 作品だけを論じて敏感に察知している面がある。

また『ソネット集』で伝統的に語られる詩人と美少年の關係の物語の一貫性を否定し, 一方ミルトンの『失樂園』に登場するサタンの性格分析に近いことをキリスト教的な色眼鏡なしに捉える点がある。何より歴史感覚がなく, シェイクスピアの登場人物もミルトンが描くサタンも, 同列に論じられ, 虚構が無視されるかのように「政治」として語られるところに旧世界とははっきり違う感覚がある。その感覚に照らし, そもそもいささか強引に詩人と美少年の關係の物語をつくりあげてしまった伝統的な『ソネット集』観も, サタンをプロテスタントのキリスト教の色眼鏡なしには捉えられない態度も, 検討を要することに気づかされる。旧世界的(というよりイギリス的)な文学観が絶対正しいともいえないのだ。

そこには, シドニーにマゾヒズムを読む論文について先述したのと同じく, 国家ともインテリとも一体化しないアメリカ独特の民衆感覚がある。強いてシェイクスピアと同時代の文学と照合させれば, スペイン黄金期文学の主役である民衆に近い感覚がある。それもセルバンテスの『ドン・キホーテ』の虚構, 実在をないまぜ, サタンもプロテスタント的な思索なしに実在のものとして登場する感覚に近い。

アメリカのシェイクスピア研究学位論文は, シェイクスピアをヨーロッパ文学と捉え, 例えばスペイン黄金期文学の延長で考え, そこにはないシェイクスピアだけの特徴として当時のイギリスのインテリグループの思潮を敏感に感じとり, ベーコンの影響を重視する。

シェイクスピアのすべてをイギリス独自のものと考えたがるイギリスのシェイクスピア研究とは異なる面がある。それを読むことの意義は, スペインが国家としてはイギリスに破れる中で文学だけが輝いた黄金期文学の主役が, 国家と一体になった軍人, 政治家, 僧侶, インテリのどれも信用できない中で, イスラム教徒と戦いを強いられる民衆の立場が浮き彫りになるからである。

これは, イラク戦争に突入し, テロ対策に追われる現在のアメリカ合衆国に酷似する面がある。シェイクスピア研究を介して, シェイクスピア時代のヨーロッパ(イギリスだけではなく)と現在の世界を重ねて見ることが出来る意義がある。